

## 羅願爾雅翼考

二六六

澁澤 尙

## 緒言

かの朱熹に「端良、此に止<sup>お</sup>はるは極めて傷惜すべし」(『晦庵先生朱文公文集』卷三十五「與劉子澄」)とその早世を哀惻させた人、それが字端良、存齋と號した南宋の羅願である。朱熹に遅れること五年ほど、紹興六年(一一三六)に生を徽州歙縣(現安徽省黃山市)に享け、淳熙十一年(一一八四)に知鄂州在官のまま遽然として卒している。朱熹は續けて「社記は樸拙粗疎にて文字を成さず、端良以て如何と爲すかを知らず。渠<sup>かれ</sup>の文字は細密、經緯有りて愛すべし」と記し、羅願とこの書翰を送った劉清之とに依頼されて淳熙十年春に執筆した己が「鄂州改建社稷壇記」の鄙拙に比して、羅願の遺稿集『羅鄂州小集』に收める諸文が「細密」で「經緯」あると稱揚し、「羅集等、異時に刻就<sup>な</sup>り、各おの一二本を求」めてもいる。まことに「南渡の後、文章に先秦西漢の風有るは、惟だ羅鄂州一人のみ」(方回「爾雅翼跋」)なのであった<sup>①</sup>。

宋代地方志の傑作とされ、乾嘉の章學誠も「今の學者、宋人の方志を論ずるに、亦た羅氏の新安志と范氏の吳郡志とを推して稱首と爲すは異辭無し」(『文史通義』卷八)と確言する『新安志』の著者として知られる羅願であるが、その「學たるや、三代の制作名物、帝王經世の迹、古今治忽の變より、下は草木蟲魚の隱蹟<sup>およ</sup>に逮ぶまで、博考精思、淹貫せざる靡<sup>な</sup>」(趙汭「書羅鄂州小集目錄後」)きものであったという。

この小論では、草木鳥獸蟲魚における「探蹟索隱」(『周易』繫辭傳)、すなわち幽玄蘊奧を探究した成果であり、時に「奇書」(洪焱祖「爾雅翼識語」)とも稱される動植物専門の詞典『爾雅翼』の特徴について、その撰述者たる羅願の生涯や宋代の雅學、また本草學やいわゆる「鳥獸草木之學」と關わらせながら仔細に考察を加えてみたい。

## 一 羅願の生平

羅願は、朱熹や周必大の畏友であり、朱熹『小學』の實質的な撰者とされる靜春先生こと劉清之ともきわめて懇意の間柄であったが<sup>②</sup>、その傳記は、正史においては父である羅汝楫の傳に附載されるのみで、それは八十字にも満たない簡素なものである<sup>③</sup>。そこで、まずは羅願の事蹟や羅氏の經歷を、比較的詳細な曹涇「鄂州太守存齋羅公傳」(『新安文獻志』卷九十四、以下「羅公傳」)や汪舜民『徽州府志』卷七「羅願傳」(以下「羅願傳」)等に基づきつつしばし追ってみよう。

徽州羅氏にとって大きな轉機となったのは、羅願の父汝楫が政和二年(一一二二)に進士に及第し、以後中央官界で要職を歴任したことである。宋濂「徽州羅府君墓誌銘」(『宋學士文集』卷四十四)に「其の先、祝融の裔より出で、封を羅に受け、子孫遂に羅を以て氏と爲す」と説き起こされる羅氏は、曹涇「羅公傳」や洪适「羅尙書墓誌銘」(『盤州文集』卷

七十七)によると、春秋の頃は宣城や枝江といった襄荊(現湖北省一帯)の間に居住し、その後、豫章(現江西省北部)に移っている。「五季之亂」すなわち五代の戦亂を避け、東して徽州に落ちついたのは、羅願の高祖仁昇の頃であったと思われる。<sup>⑤</sup>

さて、『宋史』に立傳される羅汝楫、字彦濟は、中央官僚として官は吏部尙書(正二品)に至り、死後に文散官における最高位、開府儀同三司(從一品)を追贈される一廉の人物であった。<sup>⑥</sup>晩年、知嚴州軍州事に除せられた際も、龍圖閣學士(正三品)を帯びて地方に出ているのであるから尊崇されていたのであろう。特に注目されるのは、汝楫が吏部尙書に就くまでに監察御史、殿中侍御史、右諫議大夫、御史中丞といった、彈劾や諫言を旨とするいわゆる「言路官」を歴任していたことである。御史臺は文武百官の彈劾糾察を司るが、中丞はその實質的な長官であった。

實は時の宰相は、後に朱熹に痛烈に罵倒され、温州縣學にあったその祠宇まで毀たれることとなる悪名高い姦臣の秦檜であった。<sup>⑧</sup>つまり、羅願の父汝楫は、對金講和派側に立つ臺諫の徒として、岳飛に代表される抗戰論者たちを執拗に肅正していたのである。當然のことながら、羅願の撰になる『新安志』先達篇に收められる父の傳記「先君尙書」に、秦檜との接點は仄めかされてもいない。しかし、正史や南宋初期の貴重な史料といえる李心傳『建炎以來繫年要錄』を閲すれば、汝楫が秦檜と密接な繋がりをもっていたことが容易に明らかとなる。<sup>⑨</sup>このことは羅願にとって終生うしろめたさとして強く意識されていたに相違なく、後述するように羅願の死にまつわる奇話にも影響を與えることとなるのである。

羅汝楫は、紹興二十八年(一一五八)に死去した。時に知徽州として赴いていた『隸釋』で知られる洪适(洪邁の兄)が、前出「羅尙書墓誌銘」を羅願の生母兪夫人の「兪淑人墓誌銘」とともに贈っている。そこには

汝楫に男子六人があることが記されており、みな恩蔭により仕官していたらしいが、進士登第は五男の羅願だけだったようだ。

羅願は、「幼くして凝重寡言、資特に穎異なり。甫めて七歳にして能く青草賦を爲り、以て父を壽ぐ」(「羅公傳」とされ、髫年にして「穎異」、つまり拔群に優秀であったという。さらに、「少長じて落筆すれば萬言なるも、既に冠すれば乃ち數月、妄りに一語をも下さず」(「羅公傳」、「其の精思すること此くのごとし」(方回「爾雅翼跋」とあり、その好學深思ぶりがうかがわれよう。

紹興二十五年(一一五五)、羅願二十二歳、恩蔭を以て承務郎(從九品)に補せられ、監當官たる監臨安府新城縣稅を授けられる。その三年後、「連れて内外艱に丁たる」(「羅公傳」とあるからほぼ同時期に父母を亡くしたらしい。三十二年(一一六二)、監饒州景德鎮稅として「能名有り」(「羅公傳」、乾道元年(一一六五)、祠祿官の監南嶽廟を受け、翌年ついに進士の第に登り「才望、斗ち著れ」(「羅公傳」、饒州鄱陽知縣を授けられるも才を恃みて往かず、主管台州崇道觀に祠祿を領している。なお、羅願は恩補の位階を有しながら、實力をもって科擧に臨んだのであるから、いわゆる鎖廳試による合格であったのであろう。八年(一一七二)、通判贛州軍州事となり州事をも攝行する。清廉な政治と風紀の美化により劫掠や訴訟もなくなり、「贛人、之を頼みとし頌聲翕然」(「羅願傳」)たるありさまであったという。このとき同州教官であった劉靖之(清之の兄)と誼あり、官事の暇をみつけては倦まず學宮に到り「淑艾の功」(「羅公傳」、すなわち後學育成に勵んでもいる。

淳熙元年(一一七四)、『爾雅翼』の稿成り、翌年『新安志』も成る。時に羅願四十歳、公私ともに充實しつつあった時期に當たるであろう。六年(一一七九)、秩滿ちて知南劍州軍州事に任ぜられる。羅願の政績について、「公宜しく清要の選に在るべし」(「羅公傳」といった朝廷への奏聞

が續き、陞對の上奏文においても「民を富ますを主とし、浮文を爲さず、積弊を切中す」（『羅願傳』）などと鋭く積年の弊害を突いていたようで、孝宗の「卿の磊落たる議論、采るべし。必ず朕の委に副はん」（『羅願傳』）との賞識と大臣らの推薦とを得て、十年（一一八三）、知鄂州に改められた。このとき朱熹は、「淳熙十年春、朝奉郎知鄂州事、新安羅侯願、書を以て來る」（『晦庵先生朱公文集』卷七十九「鄂州社稷壇記」）と記しているので、朝奉郎（正七品）に補せられていたものと思われる。

都督州格の鄂州（現湖北省東部）は長江中流域にあつて最大の城市であり、「今の巨鎮」（葉適『水心集』卷九「漢陽軍新修學記」）と稱され、洪邁により「鄂州は富商武邦に寧んじ、大肆を啓き縑帛を貨とし、交易豪盛、一郡の甲たり」（『夷堅志』支庚卷五「武女異疾」）と描寫される華中の大都市であつた。淳熙四年（一一七七）、成都からの歸路この地に立ち寄つた范成大は、その繁盛ぶりを長江沿いに數萬軒の家々が並び、商店は櫛の齒のごとくに密集、酒樓は壯麗さを誇り、「川（四川）・廣（廣東）・荆（湖南）・襄（湖北）・淮（江蘇）・浙（浙江）の貿遷の會」（『吳船錄』卷下）であるなどと記録し、その殷富をきわめるさまを活寫している。羅願はこの任地に赴くや、時に通判鄂州軍州事であつた知音の劉清之とともに勸學劬農に盡力し、烈女の祠堂を整備して「鄂州張烈女祠堂碑」（『羅鄂州小集』卷四）を撰するなど活躍している。その治績は、城壁の修築や整備といった防衛、土地の測量や饑民對策をも含む田制、治安の維持や奴婢掠賣を禁止する司法、醫療の充實や疾病對策といった衛生にまで及んだ。しかし、赴任のわずか翌年、淳熙十一年（一一八四）七月十三日、急逝することになる。行年四十九であつた。

『宋史』は、その死因についてすこぶる傳奇的な説を載せる。それは、「鄂州に知たりて治績有るも、父の故を以て敢て岳飛の廟に入らず。一日自ら吾が政の善なるを念ひ、姑くして往き之を祠るも、甫めて拜するや

遽に像前に卒す。人疑ふらくに飛の憾み釋されずと云ふ」というものである。つまり、岳飛廟における像前での頓死は祟りによるもので、それは父の羅汝楫が臺諫として秦檜側に立つて岳飛を弾劾したからであると噂されたというのである。鄂州は、ここを本據地として軍を展開させた岳飛ゆかりの地でもあり、乾道五年（一一六九）には岳武穆祠が建設されていた。岳飛に「鄂王」が追封されるのはやや後の嘉定年間のことであり、羅願が赴任した頃は祠廟落成してまだ十五年ほどであるが、謬醜秦檜が謀殺した武穆岳飛は、既に篤い信仰を集めていたから、とかくの風聞が喧傳されたのも無理はないのであろう。

しかし、曹涇「羅公傳」は、『新安續志』を引いて「旱に値ふも日中に立ち、精禱して疾に致る」と述べ、「鄂人、像を靈竹寺の孟宗泣竹處に繪き、劉貳車（劉清之）、爲に小集を郡に刊す」と續けている。つまり、羅願の急死は鄂州大旱の際に日中精禱した、いわば鞠躬盡瘁のゆえであるという。陸以活も「宋羅汝楫の子願、鄂州に知たりて善政有り。曹涇、本傳を作るに新安續志を引きて謂ふ、鄂州大いに旱し、願、日中に立ちて請禱し、疾に致りて卒すと。王禕、小集後序を作りて亦た然りと云ふ。乃ち宋史に、鄂州に知たるも、父の嫌を以て敢て岳廟に入らず。一日自ら吾が政の善なるを念ひ、姑くして往き之を祠るも、甫めて拜するや遽に像前に死すと謂ふは、是れ假りるに神忠武（岳飛）を以てして適たま其の妄なるを見んと欲すればなり。聰明正直なること忠武のごとし、豈に其の父の惡に因りて譴を其の子に及ぼさんや」（『冷廬雜識』卷一）と述べ、正史の妄説を批判する。また、『四庫全書總目提要』（以下『四庫提要』）は、「願の父汝楫、秦檜を助け以て岳飛を害す。天下の公怒を犯すも、願、學問該博、文章高雅、乃ち卓然として以て自立する有り。父惡の掩ふ所と爲らず。（朱熹・方回の讚辭引用中略）朱子は南宋の初めに當り、方回は南宋の末に當る。其の推重すること一轍に出づるがごとく、一代の作者た

ること願に於いて異詞無きを知るなり」と持平の論をもつて評している<sup>15</sup>。このように、高官であった汝楫の罪過を引き合いに出されるのが常であった羅願は、恩補だけに頼らず進士に及第し、時には天子の眷顧をことうむる実績を上げながらも、父とはまったく相違して中央の政界と離れた地方官や祠官ばかりを歴任した生涯を送ったのであった。あるいはそれは、文雅郁々たる徽州という土地にゆかりのある學問や著述に専念せんがため、宋代士大夫にありがちな自ら切望したものであったのかもしれない。顯官に昇ることなく夭逝した羅願でこそあったが、各々特色のある『新安志』と『爾雅翼』をはじめ、多くの名文を収める『羅鄂州小集』の相次ぐ刊行により、「蓋し傳道（羅願後裔）の先、宋に仕へて累世に名卿を爲すも、（羅）鄂州の名、尤も著る」（王禕「送羅傳道序」）と徽州羅氏を代表する人物として、むしろ著作を残さなかつた羅汝楫よりも後世に語り継がれ、その子孫らも「復た彬彬然として道を稱すべき者多く、故に新安の世家を論ずるに、未だ羅氏より盛んなる者有らざるなり」（王禕「羅鄂州小集後序」）などと稱傳されてゆくことになるのである<sup>16</sup>。

## 二 宋代の雅學

そもそも『爾雅』は、「五經を訓釋し、同異を辯章し、九流の通路、百氏の指南を實たし、多く鳥獸草木の名を識り、博覽にして惑はざる所以」（『經典釋文』序録）のものであり、釋詁を劈頭に、釋言、釋訓、釋親、釋宮、釋器、釋樂、釋天、釋地、釋丘、釋山、釋水、釋草、釋木、釋蟲、釋魚、釋鳥、釋獸、釋畜の諸篇より成っていることは周知である。如上「多識鳥獸草木之名」の一句が、孔子の言「小子、何ぞ夫の詩を學ぶこと莫きや。詩は以て興すべく、以て觀るべく：多く鳥獸草木の名を識る」（『論語』陽貨）の引用であることから明らかなように、特に釋草以下の

各篇は『詩經』所詠の草木鳥獸蟲魚との關係が深く、その經文の多くが毛傳鄭箋を初めとする『詩經』の漢代諸注とも一致している。

釋草篇以下は文字通り動植物の名稱を列擧し、その古今雅俗を述べており、古代の生物詞典としてまことに貴重ではあるが、いわゆる「甲は乙なり」式の訓詁の聯續は『說文解字』同様に簡潔をきわめ、釋草篇以下七百數十條は同義語反復にのみ終始することが多く、後世にあつてその動植物の實體に迫るのは容易なことではない。『經典釋文』や『隋書』經籍志には、兩漢三國六朝期に相次いで現れた『爾雅』注、例えば健爲文學、劉歆、樊光、孫炎、沈旋らの名を載せるが、それらのいずれもが早々に散佚しており、残された數十條を輯佚書や類書で確認しても、訓詁學の域を何ら出ているものではない。

唯一まとまった形で現存する最古の注、それは晉の郭璞、字景純のものである。奇書『山海經』『穆天子傳』を縦横に解し得たほどの博覽強記をもつて『爾雅』の古語名物に挑んだ勞作であり、九經に擧げていたという北宋の邢昺も如上に列擧の注家を「各おの名家と雖も、猶未だ詳備せざるがごとし」とその遺漏をいい、「惟だ東晉の郭景純のみ心を用ふること幾ど二十年、注解、方に畢くし、甚く六經の旨を得、頗る百物の形を詳らかにし、學者、焉を祖とし最も稱首と爲す」（『爾雅注疏』序）と郭璞注への稱讚を惜しまない。實は、後章で述べるように羅願の『爾雅翼』もこの郭注を起點とするのは無論のこと、その注釋の態度においても大いに影響を受けているふしがある。

そこで、『爾雅』の郭璞注の特徴について、特に釋動植物諸篇への注釋に焦點をあて簡略にまとめおけば、次の三點となるであろう。まず、自らの實見體驗を重視し、過去の文獻のみに依據しない。次に、存疑の場合には未詳や未聞とし、知らざるを知らずとなす姿勢に躊躇がない。さらに、經學訓詁だけではなく、實體そのものに迫ろうとする、いわば名

物學的、本草學的な態度を常に併せもっている。

一點目、自ら山野に分け入り親驗目睹するのは本草家の常套である。そのことは、郭注所引の書物を一瞥しても、經書以上に本草書からの引用が際立って多いことから容易に理解されよう。この「本草」なるは、梁の陶弘景が集成した『神農本草經集注』以前の今は亡き藥物書、例えば『桐君采藥錄』『雷公藥對』『李氏藥錄』等も多分に含まれていよう。

二點目、これは従來の經學家にはほとんどなかった態度であろう。『山海經』にみえる動植物についても、しばしば未だ詳らかにせずと素直に記す郭璞であるが、『爾雅』においても、例えば釋草篇各條の一割以上に亙って未詳未聞に類する語がみえている。

三點目、郭璞は他の『爾雅』注のごとく「甲は乙なり」式の訓詁に終始しない。地域を明示してはその方言、異名、俗稱を挙げ、時に産地とともに藥效、用途、俚諺などにも觸れる。形態や生態についても詳しく、動植物誌、物産誌としての性格をも備えており、むしろ陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』をほうふつとさせるものがある。

以上の特徴は、宋代の雅學にも十分受け継がれているであろう。しかし、邢昺、字叔明の疏に關しては、少々趣を異にしているといえる。確かに邢昺は郭璞の注を絶讃し、咸平二年（九九九）、奉敕により『爾雅注疏』を撰するにあたり、句讀も含め全面的に郭注に依據してはいるが、それはなにか形骸化したものであった。邢疏は孔穎達『毛詩正義』などを適宜抄録しつつ、郭注には何らの異議を唱えることなく右から左へと敷衍するのみであり、郭璞が意を決して記したであろう未詳未聞についてもついに一言も觸れることはなかった<sup>16</sup>。それは、「疏不破注」との原則を墨守したままであるのが、「是（邢昺）の學も亦た未だ人に過ぐることを能はざるなり」（錢大昕）、「多くは毛詩正義を掇拾し、掩ひて己が説と爲せり」（邵晉涵）などしばしば悪評されるゆえんでもある。この邢

疏以降、宋代における雅學で重要な著作は、陸佃『爾雅新義』『埤雅』、鄭樵『爾雅注』、そして羅願『爾雅翼』であろう。これらのうち、生物を中心とする名物に多くの蘊蓄を傾けた郭璞の雅學を繼ぐものとしては、まず、北宋最末期の宣和七年（一一二五）に刊行された陸佃『埤雅』が擧げられる。

陸佃、字農師は越州山陰の人。かの陸游の祖父であり、正史によると學を王安石に受け、『禮象』『春秋後傳』『鵬冠子注』といった多くの著作があったという。それらは既に亡佚しているものの、現存する『埤雅』『爾雅新義』には、荊公新學の影響が強うかがわれ、殊に「先公（佃）、獨り詩を説くを以て名を得、其の鳥獸艸木蟲魚に于て尤も多く識る所」（陸宰「埤雅序」）があったらしい<sup>18</sup>。

釋魚、釋獸、釋鳥、釋蟲、釋馬、釋木、釋草、釋天の八篇二十卷からなる『埤雅』は、子陸宰の序によれば、時に『詩講義』が盛傳していた陸佃が、神宗の求めに應じ「説魚」「説木」の二篇を進獻、さらに益加筆削して初め『物性門類』としたが、その後も繼續修訂し「僅かに四十年、獨り博く群書を極むるのみにあらず、農夫・牧夫・百工・技藝、下は輿臺・阜隸に至るまで諏詢せざる莫く、苟も聞く所有らば、必ず試験を加え、然る後に記録」（陸宰序）して、ついに『爾雅』の「埤」（補佐）たるべく『埤雅』と名づけたという。風雷雨電星辰を扱う釋天篇があるので純粹なる動植物詞典とはいえないが、昆蟲を含む動物約百九十種、植物約九十五種が立項されており、宋代の雅學のみならず生物學史においても重要な著作であることには相違ない<sup>19</sup>。

陸佃が農夫から阜隸（奴僕）に到るまで詢問したというのは、後章において詳述する羅願の本草家的な姿勢と關わり興味深いが、聲をもって義を説き過ぎる王安石『字説』に依存することの多い『埤雅』の評価は必ずしも芳しくない<sup>20</sup>。例えば、釋獸篇にて「猫」を解して「鼠善く苗を害

し、猫能く鼠を捕り苗の害を去る。故に猫字、苗に従ふ、「𪔐」を解して「小鹿のごとくして美なり。故に章に従ふ。章は美なり」とするなどは、まさに蘇軾に揶揄された類のいわゆる右文説であろう。すなわち「波」を水の皮と解したところ、東坡がそれでは「滑」は水の骨なのか、と荆公を黙らせた笑い話（『鶴林玉露』卷三甲）をほうふつとさせ、「陸氏、之（右文説）を用ひて慎まず。未だ多く穿鑿附會の説を免れず。…其の繁文蕪詞、訓詁の體例に乖る有り」（胡樸安『中國訓詁學史』）などと、『埤雅』は節度を超えた音義説、牽強附會の論、冗長蕪雜の辭多しと見なされるのも無理はない。生物學史研究の近人は、しばしば羅願の『爾雅翼』と『埤雅』とを比較して、前書は後書以上に考證や典據が博引精確で主張も穩當實直であるとすが、これは『四庫提要』の「其の書（『爾雅翼』）、考據精博にして體例謹嚴、陸佃埤雅の上に在り」との高評をふまえてのことであろう。

羅願は、その『爾雅翼』自序において「此の書の成るや、雅の羽翰たらん。其の涵すこと海のごとく、其の負ふこと山のごとし。…千世の下、雅と並行し、後に子雲・君山（揚雄・桓譚）の儔有らば、乃ち其の精なるを知らん」、つまり、我が書は『爾雅』の大きな羽翼たりて千代に並び行われ、後世の君子の認めるところとなろうと大いに自負しているが、確かに宋代雅學の、特に陸璣や郭璞に始まる『詩經』『爾雅』の名物學的視點に立脚してみれば、羅願の『爾雅翼』こそはきわめて出色の著作であろう。かの王應麟は、自序に呼應して「纂次に典則有りて、班馬（班固・司馬遷）をも追ふべし。雅の忠臣たりて、之に翼して以て飛ばん」（『爾雅翼識語』）と讚辭を呈し、近人の胡樸安らも、宋代の儒者は性理學ばかりで名物學がおろそかになっていたけれども、鄭樵・陸佃・羅願らの成果があったとしつつ、「鄭は專書に非ず、蘭蕙を以て一物と爲すがごとく疏漏時に有り。陸は多く王安石の字説に比附す。而して羅書は善と爲す。

（『四庫提要』の褒辭中略）之を要するに羅氏の書、名物學上に在りて自ら相當の價值有り。洵に爾雅の翼たるべし」（『中國訓詁學史』）と高く評價するのである。

ここで、『爾雅翼』の詳考に入る前に、如上、胡樸安の「（宋儒は）性理の談のみを詳らかにし、名物の辨を略く」との言に關わり、宋代におけるいわゆる「鳥獸草木之學」について検討を加えておきたい。

### 三 鳥獸草木之學

經學はもちろんのこと、「禮樂・文字・天文・地理・蟲魚・草木・方書の學」（『宋史』儒林傳）に通じていたとされる夾漈先生こと鄭樵、字漁仲は、性理學盛行の宋代にあつて實學の、殊にいわゆる「鳥獸草木之學」を重視した學者として名物に博雅の才をみせ、『詩名物志』『本草成書』『本草外類』等の專著もあつたらしく、周知の『爾雅鄭注』にもその蘊奥が示されている。しかし、その主張がいかなく開陳されているのは、雄篇『通志』二十略のうちの『昆蟲草木略』であろう。

その自序にいう、今の「學者、皆窮理盡性の説を操り、虛無を以て宗と爲し、實學に至りては、則ち置きて問はず」と。さらに、「夫れ詩の本は聲に在りて聲の本は興に在り。鳥獸草木は乃ち興を發するの本なり。漢儒の詩を言ふ者は既にして聲を論ぜず、又た興を知らず。故に鳥獸草木の學廢れり」と批判を續けるのである。鄭樵は、三國吳の陸璣撰といわれる『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』を「江左の騷人」、つまり江東において屈原「離騷」よろしく種々の草木に秀でた者の作として一定程度評價しながらも、その系統性がいまだ不十分であるとし、後の雅學においても「鳥獸草木之學」が十全に展開しなかつたことを指摘する。その原因は「大抵の儒生、多く田野の物を識らず、農圃の人、又た詩・書の旨を識らず、

二者由りて參合する無く、遂に鳥獸草木の學をして傳はらしめ」ざるのゆえであるという。しかし、人命に關わる本草學のみが文獻にばかり頼らずに眞實を追究して發展し、まずその成果は陶弘景の『神農本草經集注』に結實したとする。

鄭樵は古籍中の名物について、「古人の言の明らかにし難き所以は、書の理意を明らかにし難きが爲に非ず、實に書の事物の明らかにし難きが爲なり」（『藝文略』）とも述べているが、その「鳥獸草木之學」においては顯然として陶弘景の影響がある。自序は續ける、「臣少くして讀書を好み、世意に涉るかかは無く、又た泉石を好み、弘景を慕ふるの心有り。茅を夾あはら際あはらの山中に結び、田夫野老と往來し、夜鶴曉猿と雜處す。飛潛動植を問はず、皆其の情性を究めんと欲す。是に於て陶隱居（弘景）の書を取り、復た（藥數を）益すに三百六十を以てし、以て周天の數に應じて之を三にす。已に鳥獸草木の眞を得て、然る後に詩を傳へ、已に詩人の興を得て、然る後に爾雅を釋す」と。そして、次のように締めくくるのである。「夫れ物の明らかにし難きは、其の名の明らかにし難きが爲なり。名の明らかにし難きは、五方の名を謂ひて既已に同じからずして、古今の言も亦た自ら差別あり。是を以て此の書、尤も其の名を詳らかにせり」と。

ここで、鄭樵のみならず羅願『爾雅翼』においてもたびたび引用される陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』（以下『詩疏』）についても一考しておこう。『詩疏』は「原本久しく佚し、此の本、何人の輯する所かを知らず、大抵、詩正義中より録出す」（『四庫提要』）といわれ、『重較說郛』から出たとみられる現行本は、主に『毛詩正義』所引百數十條から輯佚したと考えられているが、元初の『文獻通考』經籍考や『宋史』藝文志あたりまでは書名をたどることが可能であり、兩人はいまだ『詩疏』の原本をも見ていたものと推される。名と物との關係性を通時的かつ共時的に追究する名物學は、『論語』にみえる『詩經』學習の功用から「多識の學」と

呼ばれることは上述したが、「多識を講ずる學者、固より當に此を以て最古と爲すべし」（『四庫提要』）とあり、名物學における最初のまとまった成果が陸璣の『詩疏』なのであった。

動植物に對する毛傳鄭箋の態度は、當然ながらすこぶる禁欲的であり、單純に異名を當てる「甲は乙なり」式の訓詁に徹していた。時には互訓や「蝸、蟾也」（爾雅「七月」傳）、「蝸、蟬也」（大雅「蕩」傳）といった異訓の例も散見され、後世に混亂をもたらしめることとなる。しかし、『詩疏』はそのものの同定を目指す名物學的な立場から、單に別名をあてがうだけに終わらないことも多い。

例えば、大雅「蕩」の「如蝸如蟾」について、「鳴蝸は蟬なり。宋衛にては之を蝸と謂ひ、陳鄭にては蟬と云ひ、海岱の間にては之を蟬と謂ふ。蟬は通語なり。蟾蟬は大にして黒色の者、五徳の文清廉儉信有り。一名は蝸蚘、一名は蚘蟬。青徐、之を蝸蟬と謂ひ、楚人、之を蝸蚘と謂ひ、秦燕にては之を蚘蚘と謂ひ、或いは之を蝸蚘と名づく」などと、揚雄『方言』を利用しつつその地域性や特徴について詳細に語る。あるいは、鄭風「溱洧」の「方秉蘭兮」に對し、毛傳は「蘭は蘭なり」とどまるが、『詩疏』においては、まず「蘭は即ち蘭、香草なり」と通名と所屬とを記し、次に「春秋傳に曰く、蘭を刈りて卒すと。楚辭に云ふ、秋蘭を紉つなぎて以て佩と爲すと。孔子曰く、蘭は當に王者の香草と爲すべしと。皆是なり」と諸史料を引用し、さらに「其の莖葉は藥草の澤蘭に似たるも、但だ廣くして長節なり。節中は赤く高さ四五尺、漢の諸池苑、及び許昌の宮中は皆之を種うと生う態や生育環境に觸れ、最後に「粉中に著すべし。故に天子、諸侯に茝蘭を賜ひ、藏衣著書中に白魚を辟さくるなり」と用途や效能にも言及する。これは、ほぼ同時期の郭璞や後述する陶弘景にも見てとれる態度であり、もはや經學訓詁の域を、さらには名物學の域をも超え本草學的な視点を併せもっているといつて過言ではないであ

ろう。<sup>27)</sup>  
さて、鄭樵がこの『詩疏』以上に高く評價し、また「有慕弘景心」（自序）などと大いに敬慕の情を寄せたのが陶弘景であり、その『神農本草經集注』なのであった。

南朝の宋齊梁期に互り異才を恣にした陶弘景、字通明は、幼くして葛洪『神仙傳』を讀んで養生の高志を抱き、「讀書すること萬餘卷、一事知らざれば以て深恥と爲す」（『南史』隱逸傳）態度で諸學を修め、弱冠に滿たずして南齊の高祖に召されて諸王の侍讀となるも、不惑の頃には官途を捨てて句曲山（漢の仙人三茅君にちなみ茅山とも）に隱棲、自ら華陽陶隱居と號した。爾後、名山遍歴、仙藥尋訪、盤桓吟詠を専らにし、三層の樓閣を築いては鳳笙に興じ松籟を愛で、欣々然と泉石に遊ぶそのさまは、望見する者をして仙客かと疑わしめたという。性は著述を好み、老いてはいよいよ篤く、もつとも「陰陽五行・風角星算・山川地理・方圖產物・醫術本草」（同）に明るかった。「隱居先生、茅山巖嶺の上に在りて、以て餘暇に吐納し、頗る意を方技に遊ばせ、本草の藥性を覽る。聖人の心を盡くすを以爲ひ、故に撰して之を論ず」（『本草經集注』自序）とあるので、この頃にかの『本草經集注』が成ったものと考えられる。梁の武帝からの尊崇も厚く、時人が陶弘景を「山中宰相」と稱したのは、さらにこの後のことであつた。

『隋書』經籍志を一瞥すれば、かつて多くの本草書が林立していたことが容易に知られるが、陶弘景によると、その状況は「魏晉已來、吳晉・李當之等、更ごも復た損益あり。或いは五百九十五、或いは四百四十一、或いは三百一十九。或いは三品混糅し、冷熱舛錯し、草石分たず、蟲獸辨つ無し。且つ主治する所、互ひに多少有り」（自序）という混亂の極みに達していたのであるという。これを治めるため、陶弘景は『神農本草經』三品合三百六十五種を基幹とし、別に魏晉以來の藥物、藥方を包攝勘案

して『名醫別錄』を纂修、これを本經に適宜挿入して、まず「本草經」を校定している。『本草經集注』は、この藥品名に當時の同定を加え、さらに異名や用法、出產地等を詳しく注記した劃期的な本草書なのであつた。後代、敕撰にかかる唐『新修本草』も宋『開寶本草』も、傳統的な本草書の終着點たる『政和新修經史證類備用本草』に到るまで、みなこの『本草經集注』をもつて濫觴とするのである。

とはいへ、鄭樵・羅願の両者が『本草經集注』の原本を見ることはなかつたのではないか。『新唐書』藝文志あたりまではかろうじて「陶弘景集注神農本草七卷」と著録されるものの、『新修本草』の普及に伴い唐宋の間に原本それ自體は亡佚してしまつたらしい。『開寶本草』の纂修官が原本そのものを参照し得なかつたことは既に立證されている。それでも陶弘景の『本草經集注』を十全に活用し得たのは、本草書の顯著な性格、すなわち各藥物の解説は基本的に古説の羅列であつて、この繼ぎ足し續ける古態の保存こそが歴代本草書の特徴ゆえなのである。それでは、兩人はいずれの本草書をもつて陶弘景『本草經集注』に親炙したのであるうか。

歷朝にあつて宋ほど醫療に執心した時代はなく、「大凡、醫書の世に行はるるは、皆仁廟朝の校定する所なり」（『直齋書錄解題』卷十三）とあるように、醫學に關する書物の研究も盛んであつたが、なかでも重視されたのが本草書の校定公刊であり、宋初、太祖の敕命により撰された劉翰『開寶新詳定本草』は本草書史上最初の刊本でもあつた。それを受けた仁宗期の掌禹錫『嘉祐補注神農本草』と蘇頌『圖經本草』とは、併有するに難ありとして早くも私撰の唐慎微『經史證類備急本草』が現れたが、「其の書傳はらず、世に言ふもの罕まれ」（『大觀本草』序）であつたらしく、未刊の稿本を入手した艾晟が大觀二年（一一〇八）に刊行したのが諸「證類本草」の嚆矢たる『經史證類大觀本草』である。艾晟により増訂された

この『大觀本草』は、私撰とはいえずこぶる有用至便であったことから、十年も経たない北宋末、徽宗の政和六年（一一一六）、敕版として編纂されたのが曹孝忠『政和新修經史證類備用本草』であった。<sup>30</sup>となれば、鄭樵や羅願が撰述の際に據った基本の本草書とは、この『政和本草』ということになるうか。

しかし、錢大昕によれば、『政和本草』が奉敕による正統本草であったにも関わらず、南宋の人は『大觀本草』にばかり言及し、『直齋書錄解題』を著した陳振孫のごときもまったくその存在に觸れていないのは、頒布を前に「汴京淪喪」、つまり靖康の亂（一一二六）に遭った際に金人がそっくり持ち去ったためであるとしている。同時期に刊行された浩瀚な醫方書『聖濟總錄』が版木もろとも金軍に掠奪されたことはつとに知られており、「夫の靖康の難に追びて宣和館閣の儲、蕩然として遺すところ靡」（『宋史』藝文志）きありさまであったという。<sup>31</sup>従って、南宋ではもっぱら『大觀本草』が用いられ続けたらしく、兩人も『二十略』初稿本（一一五七項）、『爾雅翼』稿本（一一七四）完成以前の、大觀二年毘陵齋刊本や紹興二十七年國子監刊本をもつて本草書として活用、歴代諸注とともに陶弘景の『本草經集注』に親接したと思われるのである。

ところで、そもそも羅願は鄭樵と面識があったのであろうか。鄭樵は徽宗の崇寧三年（一一〇四）の生まれなので、羅願と三十歳以上も離れており、私淑こそすれ管見の限り直接の交流は見出せなかった。しかし、祖籍によって「新安人」と名乗った朱熹と羅願のごく親しい關係については既述してきたとおりであり、その朱熹は「詩序の説は紛として聚訟のごとし」（『四庫提要』）とされる『詩經』小序に對し「反序」の立場、すなわち「（詩序は）村野妄人の作る所と爲し、昌言排撃して顧みざる、則ち之を倡へしは鄭樵」（『四庫提要』）であり、「之に和するは朱子」（同）なのであった。朱熹『詩序辨説』は、「多く鄭漁仲の詩辨妄を取る」（『困

學紀聞』卷三）とされ、これは朱熹自身の言に「詩序は實に信ずるに足らず。向に鄭漁仲に詩辨妄有り、力めて詩序を詆り、其の間の言語太甚しく、以て皆是れ村野妄人の作る所と爲す。始め亦た之を疑ふも後來、子細に一兩篇を看、因りて之を史記・國語に質し、然る後に詩序の果たして信ずるに足らざるを知れり」（『朱子語類』卷八十）とあることから周知の事實である。

鄭樵が興化軍莆田縣の北に位置する夾漈山に草堂を構えて『通志』の執筆に精勵していた頃、近隣の泉州同安縣の主簿に任ぜられた朱熹が山上に表敬訪問したという逸話も傳わるが、その眞偽のほどはともかく、「擅修國史」の罪により秦檜の強い迫害に遭いながらも著述獻書を續けていた鄭樵に朱熹らが多大な敬意を抱いていたことは確實であろう。

鄭樵が臨安で卒した紹興三十二年（一一六二）、羅願は二親の忌明けて郷里歙縣からほど近い饒州景德鎮の監稅に任官しているが、その死にあつては海内の士で痛惜しないものはなく、臨安の太學生數百人が帛祭の文をものしたという。<sup>32</sup>既に樞密院編修官として『通志』が成っていたこの鄭樵の死去についても、幾分か近くに在つて朱熹とも交誼ある羅願がまったく與り知らぬということはなかつたと思われる。

鄭樵が提唱した「鳥獸草木之學」については詳述した。それは、漢儒の訓詁偏重、實學輕視による絶學の問題、動植物の正しい識名釋名の必要性、そのため、山野に分け入つての實物觀察や田夫野老と交わつての實地調査を重視し、「大抵の儒生は多く田野の物を識らず、農圃の人は又た詩・書の旨を識ら」ないので、文獻での理論と田野での實踐とを「參合」することを強く訴えるものであった。このような『昆蟲草木略』序文における主張は、羅願の『爾雅翼』自序にも大きな影響を與えているのではなからうか。

羅願は自序において『爾雅』とその注について、「漢世起こりて學

者自づから顧門を爲し、詩の道を輔成せんと欲して廣く披ひ旁く穿つ。萬物の異名、始めて篇に著れ、先師之を説くも義多くして鮮らかならず。古學の廢絶に由り、説く者をして旁縁する所無からしむ。風土同じからず、各おの偏る所に據れり」と。そこで、自らを「好古博雅には非ざれども、身は藪澤を履めば、孰か能く究宣せん」といい、田夫や「野人は能く之（動植物）を別つも、傳を見ること能はず」と指摘、「羅子、之を疾へ、乃ち其の源を探り、爾雅に因りて資と爲し、其の訓詁山川星辰をば略し、動植のみを研究して因循を爲さず。實を秋に觀、華を春に玩で、俯しては淵魚を瞰、仰ぎては鳥雲を察る。山林皋壤、物に遇ひては欣ぶ」と續け、最後に「解せざる者有らば、謀るには芻薪に及び、農圃は以て師と爲し、釣弋は則ち親しむ。用て相參伍し、必ずや其の眞を得ん」とまとめる。羅願のこうした研究姿勢、すなわち風土産地により多義異名が頻出してしまった動植物群に對し、現場の調査や現物の觀察に心を配り、不明な點があれば迷いなく草刈夫や木樵、農民や漁師に問い質し、それらを「參伍」すなわち總合的に判斷するという態度は、如上、本草家のごとく親驗目睹を重視した鄭樵、さらにはその序文の表現ともまさに軌を一にするものである。<sup>⑧</sup>「詩を釋するに深く鳥獸草木の名を究め、以て仲尼の小子に教ふるの意を明らかにせんと欲」（『昆蟲草木略』序）した鄭樵への景仰が、羅願に強く存したとみなしてまず大過ないであろう。

以上、羅願の事蹟と朱熹・劉清之との交友、郭璞の『爾雅注』と宋代の雅學、陶弘景の『本草經集注』や鄭樵の「鳥獸草木之學」などを、羅願の學問的態度やその『爾雅翼』自序と關わらせながら論じてきた。終章においては、『爾雅翼』そのものの特徴について舉例しつつ検討を加えまとめてみたい。

#### 四 羅願の『爾雅翼』

「經傳の草木鳥獸蟲魚を考論すれば、則ち許慎・陸璣・張揖・曹憲・邢昺・陸佃ら、此の翼の尤も悉はりたるに如かず」。これは、「序は（羅鄂州）小集に見ゆるも、世に未だ其の書を見」ることのない『爾雅翼』を「訪求し、公（羅願）の故從孫裳の手抄せる副本三十二卷を得」て初めて出版に漕ぎつけた方回跋文中の讚辭である。ところで、『羅鄂州小集』は劉清之の編纂による遺稿集であり、徽州地方志『新安志』は、時に知徽州軍州事だった趙不悔の援助によつて淳熙年間初頭、羅願存命中に上梓されたものであった。<sup>⑨</sup>しかし、同郷人であり律詩選集『瀛奎律髓』の編者としても知られる宋末の方回は、「今、新安志は世に行はれ、馬・班（司馬遷・班固）と等し」いけれども、『爾雅翼』は淳熙元年（一一七四）と記される自序ばかりが知られる存在であったと記している。つまり、成稿から百年を経た咸淳六年（一二七〇）、『困學紀聞』で名高い王應麟が徽州州として赴いてきた際、方回が羅一族より入手していた『爾雅翼』の寫本を校訂してようやく刊布したのであるという。<sup>⑩</sup>

残念ながらこの宋末初刊本は現存せず版木も早々に失われたらしいが、元朝の地方官、やはり歙縣の後學であり、かつ曹涇や方回の傳記をも撰した洪焱祖が、既に稀覯となつていた淳熙『新安志』に續き『爾雅翼』についても墨本を尋求、自ら難字に詳細な音釋を附し、徽州路總管であった朱霽の援助を受け、延祐七年（一三二〇）に重刊したのである。<sup>⑪</sup>ちなみに、孤本かとおぼしきこの貴重な朱霽那刻本八冊三十二卷は、陸心源『皕宋樓藏書志』卷十二に「爾雅翼之元刊本、宋新安羅願著」と著録されるもので、これまた現存最古の明洪武二年羅宣明刻本『羅鄂州小集』四冊五卷附一卷とともに現在では岩崎靜嘉堂文庫に儲藏されている。<sup>⑫</sup>

地方志にも並々ならぬ關心を寄せた章學誠に「方志の稱首」（『文史通

義』(卷八)とまで評價された『新安志』は、しかし、明末清初の頃になると「世に傳ふる所、鄂州小集、暨わび爾雅翼に止まり、新安志に至りては目、僅かに文献通考經籍中に見ゆるのみにて、傳ふる者有ること罕」(黃以祚「新安志書後」)であり、漁洋山人こと王士禛が「嘗て之を求むるも三十年にして得ず」(同)といった状況であつたらしい。これは、後續する同地域の方志が編纂されれば、およそ前志はそのうちに包含され、單體での存在意義が次第に稀薄になつてしまふことを示しており、あたかも陶弘景『本草經集注』が『新修本草』以降の本草書に漸次吸収され、唐宋の間にすっかり亡佚してしまつたことを想起させる。實用書としての性格が強い書物がたどる運命とは、往々にしてこのようなものなのであるうか。幸いにも淳熙『新安志』は、他の多くの宋元代地方志がさうであつたように完全に散逸するには到らなかつたものの、單獨で異彩を放つ『爾雅翼』ほどには注目されなくなつていつたようだ。『爾雅翼』は、宋元版の後も明の正徳十四年羅文殊重刻本、萬曆閏羅文瑞刻本など徽州の後裔、羅一族による刊行は續き、清代には『欽定四庫全書』經部小學類や嘉慶の叢書『學津討原』にも収載され廣く流傳していつたが、それは、この書に相應の特長と價值とが見出されていたからでもあつた。

『爾雅翼』三十二卷は八卷を占める釋草篇を筆頭に、釋木四卷、釋鳥五卷、釋獸六卷、釋蟲四卷、釋魚五卷、草木鳥獸蟲魚のみ全四百十八條から成る生物専門の詞典である。それは『周易』の「十翼」に做つたのか、『爾雅』の輔翼たるべく博引旁證「百家を囊括し、度なぞを扶えぐり疵きずを擿なげうち」(王應麟識語)、「事には其の始めを原たづね、物には其の族もとを徵もとめ、其の形色象貌の倫のうに肖なり、其の性情功用の備を極め」(李化龍序)、時に「漁佃・農圃・牛醫・馬師の知るべき所に則」(同)「ることも厭わず、自著が「千世の下、雅と並び行はれ」(自序)て「雅の道、復た顯らかに、功も亦た宏まらん」(同)「ことを冀い、「宋興りて二百一十五、淳熙甲午」(方回跋)、すなわち

一一七四年、時に通判贛州であつた羅願三十九歳の折に完成したのであつた。

それでは、この『爾雅翼』の特徴について、釋草篇から「菘」を、釋蟲篇から「果羸」を取り上げ具體的に考察してみよう。

『爾雅翼』卷一釋草第一篇の「菘」、すなわち「菘」(和名マコモ)は、禮書や辭賦を中心に頻見される草本であるが、意外なことに『爾雅』にその名はみえない。『說文解字』には「菘は彫胡、一名は蔣なり」、「廣雅」釋草には「菘は蔣なり。其の米、之を彫胡と謂ふ」とあり、二書の簡説に従えば、菘(菘)は「蔣」と同義であり、その米、つまり顆粒狀の實を「彫胡(彫胡)」ということがわかる。『周禮』膳夫の鄭衆注には黍・稷らとともに「六穀」の一つとして數え擧げられており、古代常用の穀物であつたことが知られる。それでは、『爾雅』には記されない菘をなゆえに羅願は立項したのであるうか。

實は、『爾雅』釋草には「彫蓬を齧かみ、黍蓬を薦しく」とある。郭注・邢疏はともに蓬の種類の別をいうとしているのみであるが、鄭樵は『昆蟲草木略』において「彫蓬」を菘と同義の「菱」とみなし、「彫蓬は米菱なり。其の米、之を彫胡と謂ひ飯を作るべし」と解しているのである。このことに加え、羅願は菘草が有する特殊な利用法にも留意していたのではないか。

古來その葉を薦席に用いた菘草は、湖沼藪澤に群生するごくありふれた禾本科多年草ながら、食用においては、「菘米」「彫胡」などと呼ばれる穀實の利用と「菘菜」「菘首」などと呼ばれる芽莖の利用とがあり、特に後者についてはそこに寄生する菌類を伴つて食するといふのである。そして、『爾雅』釋草にみえる「蘧蔬」こそが後者の「菘菜」(通稱マコモダケ)と考えられ、『爾雅翼』は卷六にわざわざこの蘧蔬を別立てし、兩項において委細を盡くして解説するのである。まずは卷一「菘」項の原

文を、全文では七百文字近くもあるので抜粋して掲げよう。

苽者、蔣草也。生水中、葉如蔗莢。江南人呼爲菱草、刈以飼馬甚肥。其生兩浙下澤者、根既相結、歲久則并土浮於水上、土人謂之葑田。刈去其葉、便可耕植。其苗有莖梗者、謂之菰蔣、至秋則爲此米。大抵葑是其根、苽是其葉耳。古者食醫、會六穀六牲之宜、則牛宜稌、羊宜黍、豕宜稷、犬宜稻、鴈宜麥、魚宜苽。釋者以爲牛味甘平、羊甘而熱、稻與黍苦而溫、鴈酸而牝苦、稷以甘濟之、皆甘苦相成。犬酸而溫、梁甘而微寒、鴈甘而平、大麥酸溫、小麥如梁、亦氣味之相成者。魚族甚多、寒熱酸苦兼有、而云宜苽者、或同是水物相宜。：又今菰中生菌、如小兒臂、爾雅謂之蘧蔬者、以茼鮒爲羹、則開胃而去酒毒、是物自有相宜者。：此米一名彫胡、故宋玉賦云、爲臣炊彫胡之飯、烹露葵之羹。又枚叔七發云、楚苗之食、安胡之飯、搏之不解、一噉而散。或曰、安胡、亦彫胡也。古人以爲美饌、今饑歲猶採以當糧、然不知貴。西京雜記云、漢太液池邊、皆是彫胡、紫蔞綠節、蒲叢之類。菰之有米者、長安人謂爲彫胡、葭蘆之未解葉者、謂之紫蔞、菰之有首者、謂之綠節。其實彫胡之名、由來已久矣。菰首者、菰蔣三年以上、心中生臺如藕、至秋如小兒臂大、謂之菱首、本草所謂菰根者也。可蒸煮、亦可生食。其或有黑縷如墨點者、名烏鬱、或云別種非也。但是植之黑壤、歲久不易地、汙泥入其中耳。

羅願はここで、單なる訓詁學的な作業に終わらせることなく、複数の視點からそのものの同定を、自身の實地目驗をもふまえて詳述している。冒頭において今に通ずる異名を示し、生育環境と姿態とを簡潔に記す。そして、「江南」「兩浙」における方言や用途を述べ、「土人」の言から用字における使い分けまでも明らかにする。續いて、古代禮書における「六穀六牲」の食醫から寒熱溫涼の藥性、辛甘酸苦鹹の五味という、いわゆ

る漢方における「氣味」の效能について解説を盡くし、ようやく『爾雅』の蘧蔬とその菜羹とに言及する。さらに、菰米「彫胡」の用例を諸文獻から引きつつ考證を重ね、最後には菰菜「菰首」の生態を完熟後に褐色變する「烏鬱」（通稱マコモズミ）現象とともに、それを別種とみなす或説を斥けつつ解明しているのである。

一見して前章に舉例もした陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』のなかば繁縟ともいえる體裁を想起させ、それは『爾雅翼』の編次がそもそも「草木鳥獸蟲魚」の順であることから示唆されるが、より用意周到で犀利な觀察眼を示した獨創的な論證となつてゐることは明白である。特に、「之（菰首）を菱首と謂ひ、本草に所謂菰根なる者なり」と本草書を引用していることは注目してよい。既述したように、郭璞もその『爾雅』や『山海經』の注釋においてたびたび本草書を利用しており、これはそれ以前の諸注にはほとんど見られなかつた郭注の大きな特徴であつた。旁徵博引で知られる『爾雅翼』は、當然ながら郭注を含めた『爾雅』を二百條以上引用しているが、『山海經』も郭注とともに五十條以上、『本草』にいたつては陶弘景の『本草經集注』を含めて九十條餘もの引用が認められるのである。

郭璞が本草書を活用しながら自らの實見をも重視し、「甲は乙なり」式の訓詁に終始しなかつたことは述べた。地域を明示しつつ方言や俗稱を記し、産地とともに藥效、用途、俚諺にも觸れ、生態についても詳述、その結果、郭注『爾雅』は動植物誌、物産誌としての性格をも兼ね備えていたのであつた。羅願が近い邢昺よりも、遠い郭璞にこそ従うべき規範を見出してゐたことは確實であろう。

そのことをより明らかにするために、羅願が別項を立てた「蘧蔬」について、『爾雅』の經文、郭璞注、邢昺疏とともに比較検討してみよう。

【爾雅】出隧、蘧蔬。

【郭注】蘧蔬、似土菌、生菰草中。今江東啖之、甜滑。

【邢疏】釋曰、菌類也。一名出隧、一名蘧蔬。廣雅云、朝生、形如鬼蓋。

【羅翼】出隧、蘧蔬。郭氏曰、蘧蔬、似土菌、生菰草中、甜滑。今江東啖

之。菰、蔣草也。江南呼爲菱草。根久盤厚、則夏月生菌。菌即謂

之菰菜、利五臟、雜鯉爲羹。呂氏春秋曰、菜之美者、越駱之菌。

則古者重之久矣。荆楚歲時記、九月九日事中、稱菰菜地菌之流、

作羹甚美。鱸魚作膾白如玉、一時之珍。張季鷹在洛、忽思吳中鱸

魚菰菜、請假而反、斯之謂也。此明亦用菰菜毛鱸羹。今說者或云

翰所思是蓴菜、恐不然爾。說文曰、菰葑也。葑即謂此菌、然非詩

所謂葑菲者。陳藏器乃云、菰、葑上如菌、葑是菰根、歲久浮水上

者。今菰首亦佳蔬、可食。

羅願は、まず郭注「蘧蔬は土菌に似て菰草中に生ず。今江東にて之を啖らひ甜滑」を支持してほぼそのまま引用、菰菜の羹の效能と美味なるを『呂覽』『荆楚歲時記』や『世說新語』識鑒にみえる張翰歸郷の逸話とともに紹介し、後者の菰菜を「蓴菜」とする一説を否定、最後に唐の陳藏器『本草拾遺』を引用している。ここで注意したいのは、邢疏が珍しくも郭注に追記した『廣雅』の引用をまったく無視していることである。

邢昺が引く『廣雅』にいう「朝生」とは「朝菌」（ヒトヨタケの類）のことで、「鬼蓋」に同じく茸を指す。陶弘景『名醫別錄』下品に「鬼蓋」一名、地蓋。垣牆の下に叢生し赤色。且あしたに生じ暮れに死す、『本草經集注』に「一名、朝生、即ち今の鬼傘なり」、後の『本草綱目』には「鬼蓋、此も亦た土菌の類、朝に生じ夕に死す者なり」などとある。ここでいう「地蓋」「土菌」とはいったい何であろうか。『爾雅』釋草に「中廬

は菌、小なる者は菌」とあり、その郭注には「地草なり。蓋かさに似て今江東にては名づけて土菌と爲す」とある。つまり、あの天蓋状の茸類を「地草」といい「地蓋」「鬼蓋」らも同義、また江東においては「土菌」と通稱することがわかる。ひるがえって蘧蔬の郭注を見てみれば、そこにも「似土菌」と記されている。どうやらこの一句を深慮なく踏襲したのが邢疏であり、それゆえに『廣雅』の「朝生、形如鬼蓋」を引く失態を犯してしまったのである。郭璞は「生菰草中」と續けているので、蘧蔬を傘状の茸類と理解してはいないが、邢昺は明らかにそれと混同しているふしがある。そもそも蘧蔬は、菰草における春の嫩芽とは別の秋の菰菜「菰首」である。それは菰草に黒穂病菌が侵入した結果、秋にかけて伸長する花莖部が膨腫となり、膨脹して白く太い筍状を呈したものであり、本邦では古く『本草和名』（九一八年）に「菰首、和名古毛都乃」、現在通稱マコモダケと呼ばれる美菜なのである。

さすがに羅願は安徽の人、『新安志』卷二「物産」の「蔬茹」項にも「菰首（菰首）は菰根是れなり」とみえ、曹州濟陰（現山東省）の邢昺よりも南方に群生する菰草について實見實食することが多かったようで、邢疏の謬見に盲従することはなかった。ちなみに、越州山陰の鑑湖畔に住まいした陸游は、晩年まで菰米と菰菜とを好んで食卓に上せていたことが詩篇の數々から知られる。<sup>④</sup>

ここで、『爾雅翼』における本草書の引用について確認しておきたい。「菰」「蘧蔬」の兩項においては唐の陳藏器の名しかみえないように思われるが、實はその敘述に次のような本草書の表現が縦横に活かされていることが、逐一指示せずとも容易に見てとれるであろう。

【孟銑・食療本草】菰菜、利五臟、邪氣、酒皸、面赤、白癩、癰瘍、目赤等、效。然滑中、不可多食。菰首、寒。主心胸中浮熱風。食之發冷

氣、滋人齒、傷陽道、令下焦冷滑、不食甚好。

【陳藏器・本草拾遺】菰首、生菰蔣草心。至秋、如小兒臂、故云菰首、一名菱首。主心胸中浮熱、動氣、不中食、食之發冷、滋牙齒、傷陽道、令下焦冷、不食爲妙。煮食之、止渴、甘冷、雜蜜食之發痲疾、無別功。更有一種小者、擘肉如黑、名烏鬱、人亦食之、止小兒水痢。治小兒患痢腹內不調、食菰烏鬱甚良。菰菜、味甘、無毒、去煩熱、止渴、徐日黃、利大小便、止熱痢。雜鯽魚爲羹。開胃口、解酒毒。生江東池澤。菰葑上如菌、葑是菰根、歲久浮在水上者。主火燒瘡。燒爲灰、和鷄子白塗之。呂氏春秋曰、菜之美者、越路之菌是也。晉張翰見秋風起思之。

【韓保昇・蜀本草】菰根生水。葉似蔗荻。久根盤厚。夏月生菌細、堪啖。名菰菜。三年已上、心中生臺如藕、白軟中有黑脈。堪啖、名菰首也。

【蘇頌・本草圖經】菰根、舊不著所出州土、今江湖陂澤中皆有之。卽江南人呼爲菱草者。生水中、葉如蒲葦、刈以秣馬甚肥。春亦生笋甜美、堪啖、卽菰菜也。又謂之菱白。其歲久者、中心生白臺如小兒臂、謂之菰手。今人作菰首、是也。爾雅所謂蘧蔬、注云、似土菌、生菰草中。正謂此也。故南方人至今謂菌爲菰、亦緣此義也。其臺中有黑者、謂之菱鬱。其根亦如蘆根、冷利更甚。二浙下澤處、菰草最多、其根相結而生、久則竝土浮於水上、彼人謂之菰葑。刈去其葉、便可耕蒔。其苗有莖梗者、謂之菰蔣草。至秋結實、乃雕胡米也。古人以爲美饌、今飢歲人猶採以當糧。西京雜記云、漢太液池邊、皆是雕胡、紫籜、綠節、蒲叢之類。菰之有米者、長安人謂爲雕胡。葑蘆之米、解葉者紫籜。菰之有首者、謂之綠節是也。然則雕胡諸米、今皆不貴。大抵菰之種類皆極冷、不可過食、甚不益人。唯服金石人相宜耳。

郭璞や陸璣のように、訓詁學的というよりも本草學的な視點をもって對象に迫ろうとする羅願のこうした態度は、本草家の陶弘景、またそれに憧憬し、「鳥獸草木之學」を提唱した鄭樵とも立場を同じくするものである。そのことは、次の「果蠃」における羅願の考證を検討することによりさらに明らかとなるであろう。なお、前掲本草書はすべて羅願が見たとおぼしき『大觀經史證類備急本草』にも轉載保存されている。

『詩經』小雅の「小宛」に「中原有菽、庶民采之。螟蛉有子、蜾蠃負之。教誨爾子、式穀似之」とあり、「螟蛉」「蜾蠃」なる二昆蟲が詠みこまれていて、例のごとく毛傳は「螟蛉は桑蟲、蜾蠃は蒲盧なり」と異名を示すのみであるが、鄭箋は「蒲盧は桑蟲の子を取り負持して去り、煦嫗として之を養ひ、以て其の子と成す。喻ふるに萬民の治め能はざる有れば、則ち能く治むる者、將に之を得んとす」との不可思議なる暗喩を説いている。桑蟲の子たる螟蛉は、『詩疏』に引く韞爲文學によると「桑上の小青蟲」であり、鄭玄は、別種の幼蟲を養育して自分の子に化かすと信じられていた蜾蠃の習性を、徳治できぬ君主は人民を有徳者に奪われてしまふことに譬え、これを暴政を敷いたとされる厲王を刺る歌であると儒教的な解釋を施した。蜾蠃すなわち『爾雅翼』における「果蠃」とは、「土蜂なり。蜂に似て小腰」（陸璣）、「卽ち細腰の蜂なり。俗に呼びて蠛蠓と爲す」（郭璞）もので、それは、現在にいうジガバチ（似我蜂）を主とするいわゆる狩人蜂の類であり、他種の蟲、例えば如上「小青蟲」のように蛾や蝶の幼蟲を狩獵しては巢中に運びこみ、そこに産卵して己が幼蟲の餌とすることが知られている蜂である。鄭玄はこのようなジガバチの習性を、青蟲を「煦嫗」すなわち保温愛撫して養育し、自分の子に變身させてしまふとみなしていたのである。しかし、こうした一種の化生説は鄭玄独自の見解ではなかったようである。<sup>48</sup>

『詩疏』は、「土蜂」が捕獲した青蟲を木穴の中に置くと、「七日にして

其の子と成る。里語に曰く、呪して云ふ、我に象よ我に象よ」と記し、これは既に揚雄『法言』學行に「螟蛉の子、殫たふれて蜾蠃こらに逢ひ、之に祝して曰く、我に類によ我に類よと。久しくして則ち之に肖にたり」とあり、蜾蠃が青蟲に向かつて我に似るように縷々呪文をかけるという特異な俗信が流傳していたことがうかがわれる。ところが、俗信とはいえこの和名の由来「似我」の呪文には一定の根拠があったらしく、船山先生こと王夫之は諸説を勘案し、「詩を釋する者、下に似之の文の有るに因り、遂に蟲聲に依附して以て義を取る。蟲能く文言六義を知る者に非ず、人之之を聽き仿髣として相似たるのみ」(『詩經稗疏』)との卓見を披露している。どうやら古人は、ジガバチが青蟲を巢中に搬入して閉塞した後立てる獨特の羽音(正確には飛翔筋の動きを頭部に傳えて立てる振動音)を呪文と聞き取っていたらしい。

しかし、鄭玄によつて經學訓詁學的にも大いに權威づけられた蜾蠃のこのような生態は、『詩經』における儒教的解釋の整合性とも相まつて早々に定着し、後代の大勢は古說墨守派が占めることとなる。太常博士の蘇頌が本草の蘊蓄を傾けたとされ、後の李自珍も「攷證詳明にして頗る發揮あり」(『本草綱目』序例上)と稱揚している『本草圖經』でさえも、「物類の變化は固より度はかるべからず。蚱蟬は轉丸より生まれ、衣魚は瓜子より生まれ、龜は蛇より生まれ、蛤は雀より生れ、白駝の相視、負蝨の相應ず、其の類は一にあらざ。桑蟲・蜘蛛の變じて蜂と爲るがごときは、異と爲さず」などと主張し、蜾蠃の化生説を強く信じて疑わなかつたのである。それでは、羅願『爾雅翼』卷二十六「果蠃」の見解はどうであらうか。

果蠃、即細腰黑蜂也。說文作囁蠃、俗呼爲蠓蠃、詩言、螟蛉有子、果蠃負之。螟蛉、桑蟲也。果蠃、蒲盧也。負、持也。箋云、蒲盧取桑蟲之子、

負持而去、煦嫗養之以成子。詩義疏云、螟蛉似步屈、其色青、細小、或在草葉上、土蜂取之、寘木空中、或書卷間筆筒中、七日而成其子。里語曰、呪云象我。而子雲亦云、螟蛉之子殫而逢果蠃、祝之曰、類我類我、久則肖之矣。唯陶隱居云、今一種黑色、腰甚小、銜泥於人壁及器物邊作房、如併竹管、其生子如粟米大、置中、乃捕取草上青蜘蛛十餘枚滿中、仍塞口以擬其子、大爲糧也。其一種入蘆竹管中者、一名果蠃、亦取草上青蟲、詩之螟蛉有子、果蠃負之。言細腰無雌、皆取青蟲教祝便變成己子、斯爲謬矣。造詩者乃可不察。未審夫子何爲因其僻邪。按陶氏之說、實當物理。然以是疑聖人、則有所不可。詩第言果蠃負之。如國君不能有其民、則爲他人所取、不言負去爲子也。猶鴟鴞云、鴟鴞鴟鴞、既取我子。亦可謂鴟取衆鳥爲子乎。但說者見其負之以往、遂因爲是說。然詩之本旨、自不如此、而箋疏及子雲之語疏矣。

『爾雅翼』は簡解の後、『說文』『詩經』以下の用例を挙げ、似我呪文化生説に言及する。しかし、「唯だ陶隱居のみ云ふ」と、近い蘇頌の化生説擁護を無視して遠い陶弘景の説を紹介し、「陶氏の説、實に物理に當たれり」と高評するのである。羅願は『本草經集注』のほぼ全文を引用し、呪文化生説を「斯れ謬あやまりと爲す」と斬り捨てる陶弘景を支持している。陶弘景の鋭利な觀察眼を伴った詳論は、まさに親驗目睹の本草家のそれであり、蜘蛛を捕獲するジガバチを「蠓蠃」、青蟲を捕獲するジガバチを「果蠃(蜾蠃)」と分類し、ジガバチも粟米大の産卵を正しくなすこと、狩った幼蟲は孵化後の餌となることを明示している。さらには、「詩を造る者、乃ち察せざるべし」とし、「未だ夫子、何爲れぞ其の僻邪に因むかを審かにせず」と、なぜに孔夫子はかような「僻邪」、すなわち歪んだ謬説に囚われたのかと、その矛先は聖人への批判にさえ及ぶ。

實は、『本草經集注』では「聖人に闕かくること有るは、多くは皆この類

なり」などとなお手厳しい筆誅が續くのであるが、さすがの羅願も「然るに是を以て聖人を疑はば、則ち可ならざる所あり。詩は第だ果嬴之を負ふと言ふのみ。…負ひ去りて子と爲すとは言はず」と辯護している。確かに、「爾の子に教誨せよ、式て穀之に似よ」と續くものの、正確には詩自體に呪文化生説が詠われているわけではない。況んや孔子をやなのであろう。羅願が「但だ説く者、其の之を負ひて以て往くを見、遂に因りて是の説を爲す。然れども詩の本旨、自ら此のごとくならず。而して箋疏、及び子雲の語は疏し」と締めくくり、古説の誤謬を鄭玄、陸璣や揚雄の責めに歸しているのは當然である。なお、この螟蛉と螺嬴の問題については、陸佃、鄭樵、朱熹らでさえ鄭箋以來の呪文化生説を支持しており、ひとり羅願のみが舊説の勢いに遡回していたのである。さらに、朱熹は『中庸』の「夫れ政なる者は蒲盧なり」の解釋においても過誤を犯している。

鄭玄は『禮記』中庸に「蒲盧は螺嬴、土蜂を謂ふなり」と注しているが、これは無論、『爾雅』釋蟲「果嬴は蒲盧」と毛傳「螺嬴は蒲盧」とに基づくものである。しかし、北宋の沈括は『夢溪筆談』辯證において「蒲盧、説く者以て果嬴と爲す。疑ふらくは然らず、蒲盧は即ち蒲葦なるのみ」と反駁する。「蒲盧」を舊注にいうジガバチではなく、字義をもつて單なる蒲や蘆(葦)の挺水性草本とみなす見解は、程大昌『演繁露』の追認を受け、朱熹『章句』にも「蒲盧を注するに、沈括以て蒲葦と爲すは是なり」と引かれてしまった。朱熹は、釋蟲「蒲盧」をも草本とみなしているわけではなからうが、『中庸』の暗喩も『詩經』小宛をふまえて、ジガバチである「蒲盧」を爲政者になぞらえていることは明白である。

『爾雅』には、釋蟲に「果嬴は蒲盧」、釋草に「果嬴の實は栝樓」とある。『廣雅』には、釋鳥に「果嬴は工雀」、釋魚に「蝻蛤は蒲盧」とある。

『説文』には、「螺嬴は虎蝻と曰ふ」とあり、さらに、後代『本草綱目』菜部の「壺盧」條には、「壺の細腰なる者は蒲盧」とある。このように、瓢箪型ジガバチ(土蜂)となり球體カラスウリ(栝樓)となり大腹烏ミソサザイ(工雀)となり肥大貝ハマグリ(蝻蛤)となり圓球カタツムリ(虎蝻)となり球體ヒサゴ(壺盧)となる、「蒲盧」や「果嬴・嬴・嬴」のよきな異類同名の聯綿語は、決して字義に束縛されてはならず、その音義でしか正解し得ないことを知るのである。もちろん、前者は唇音並母と舌音來母から、後者は「栝樓」(『方言』に前胸卵型蝻オケラ「括樓」もあり)や「壺盧」をも含めて牙音見母と舌音來母からなる圓球を表す典型的な擬態語なのであった。

なお、朱熹『中庸章句』も羅願『爾雅翼』も、ともに淳熙元年の頃に初稿が成つてはいる。しかし、前者の序文が書かれ、ほぼ定稿となるのは後の淳熙十六年であり羅願は既にこの世になく、後者は鈔本のまま宋末まで措かれていたので、劉清之を介して兩人昵懇でありながら互いの成果を見ることはついになかったようである。

以上、『爾雅翼』の特徴の一斑を、その釋草「蘧蔬」と釋蟲「果嬴」における敘述を例に考えてきた。時として自繩自縛の弊害を伴う訓詁學の陷穽にはまらない羅願の探究姿勢は、自身の経験と本草書とを縦横に活用したものであったが、「蘧蔬」における邢昺よりも郭璞、「果嬴」における鄭玄よりも陶弘景といった注釋態度にこそ端的に象徴されているであろう。鄭樵にも匹敵するこのような羅願の「鳥獸草木之學」は、再三述べたように、過去の文獻のみに依據せず、自らの實見體驗を重視し、對象そのものに迫って形態、特徴、效能、變異などを詳らかにする、まさに本草學的な視點を有したものである。前掲『爾雅翼』自序における宣言、すなわち風土の差異により衆説紛紜してしまつた動植物における古今雅俗の異名に對し、机上での訓詁のみならず現地での調査や觀

察にも心をくだき、いわゆる「不恥下問」（論語「公冶長」）、積極的に現場の木樵や農夫らに問い質すべしとの主張は、郭璞から陶弘景、そして鄭樵から羅願へと受け継がれている實事求是の精神でもあろう。その精華こそが「千世の下、雅と竝び行はれん」、また「雅の道、復た顯らかに、功も亦た宏まらん」（自序）などと自負してやまない『爾雅翼』なのであった。

それでも、「夫れ鳥獸草木の類、特に窮め難しと爲す。其の形の相似たる者、山澤の人、朝夕に従事すと雖も能く別たざる有り。其の名の相亂るる者、博物君子の風・雅を習ふと雖も能く周あまねからざる有り」（『爾雅翼』釋木「六駁」）なのである。羅願は、そのものの同定を究めるため、郭璞の注釋法に倣い、雅訓のみならず土語や俚諺にも價值を認め、しばしば「土人曰」「里語云」「俗説」などと記す一方で、「知らざる所を強ひず」（自序）という存疑蓋闕、つまり疑わしきは結論から除外するに何らの躊躇がなく、書中には「其説未聞」「不知其故」「不知何物」「未敢臆也」「當代識者詳之」との言が枚擧にいとまなく見出される。このような學問的に慎重な態度こそが「考據精博にして體例謹嚴、陸佃埤雅の上に在り」（『四庫提要』）との讚辭に繋がるのであろう。

## 結語

ここまで羅願『爾雅翼』の佳處ばかりを縷述し、過褒の嫌いなきにもあらずであったかもしれない。訓詁の學に傑れた黃侃は、『爾雅翼』も所詮は『埤雅』の亞流であり、「以て陸璣毛詩義疏・陶弘景本草注を視るに、固より遠く速ばざること甚だし」（『爾雅略説』）との冷評を下している<sup>55</sup>。當然のことながら、現代生物學の科學的視點からみれば、『爾雅翼』にも相應の誤謬や迷信に基づく曲解があり、またごく一部には右文說に

依據して附會に失した釋義も見受けられる。しかし、如上仔細に考察した結果、『四庫提要』ならずとも『爾雅翼』が『埤雅』の數段上に在ることは顯然としており、さらには『詩疏』や『本草經集注』に優るとも劣らず、兩者の成果をも十二分に咀嚼吸収してその匹儔たり得る創獲の良著と稱して大過ないであろう<sup>56</sup>。

羅願が生きた宋代は、もっぱら「學者、皆窮理盡性の説を操り、虛無を以て宗と爲し、實學（鳥獸草木之學）に至りては、則ち置きて問は」（『昆蟲草木略』序）ざる風潮であったという。二歳年上の親朋で羅願の遺稿集を上梓してくれた劉清之は、朱熹との出會いによつて應試のための俗學を擲つた人ではあるが、それでも朱熹が大成した性理の道學ばかりに盲從していたのではないらしく、苟も學問を志すならば「唯だ性理の文書のみ是れ傳へ是れ玩び、嚮かりに善き士大夫のみ是れ攀たより是れ慕はば、向來の文章に眩くらみ、訓詁に溺れ、異教に流るる者と同一の轍」（『宋名臣言行錄外集』卷十四）であると論じており、こうした主張に羅願も共感するところがあり肝胆相照らす仲となつていたのかもしれない。

しかし、その一方で窮理盡性は『大學』の「格致」とも結びつけられ、事物を具に觀察してその道理を追究する格物窮理の面をも當然有するのであるから、朱熹のいわゆる「上は無極太極、下は一草一木一昆蟲の微に至るまで、亦た各おの理有り。…一事を窮めざれば則ち一事の道理を闕き、一物格いたらざれば則ち一物の道理を闕く」（『朱子語類』卷十五）のであることも論を俟たない。まさに、「一草一木にも皆理有り、須く是れ察すべし」（『程氏遺書』卷十八）、「多く鳥獸草木の名を識るは理を明らかにする所以」（同卷二十五）なのである<sup>57</sup>。宋學と「鳥獸草木之學」とが必ずしも乖離していない點に留意すべきこと、名物學に秀でた程大昌の「大學の致知、必ず格物より始む。聖人の教へ、初學も亦た其の多く鳥獸草木の名を識るを期す」（『演繁露』序）との言に端的に示されていよう。王

應麟が『爾雅翼』識語の劈頭で「惟れ大學の始教は格物致知。萬物我に備はりて廣大精微、一草木にも皆理有り、以て類推すべし」と述べ、その掉尾で「〔『爾雅翼』は〕今より顯行し、式て永く厥垂せん。是れに繇りて大學の道を進め、學者之を葆たもてよ」と結んでいゝるのもゆえなしとはしない。<sup>58)</sup>

景德鎮の長郷書院山長として講學に努めた元朝の洪焱祖は、同郷の先人である羅願を大いに崇敬していたらしく、『新安志』を再刊したり『爾雅翼』中の難字に音注を施したりした篤學の士であつた。その跋文には、「今此の翼を觀るに、詩の義を明らかにする者一百二十章、三禮の義を明らかにする者一百四十章有奇。他、易象・春秋傳のごときも間ま亦た因りて發明有り」との稱讚を連ねている。これは、『爾雅翼』の功用が他の經書にまで及ぶことを謳つていゝるのであるが、やはり『爾雅翼』の本領は、小論において詳考してきたとおり、『詩經』所詠の如何を問わず古來衆說紛雜としてやまない草木鳥獸蟲魚の實體を、玩物喪志に墮することなく多く闡明した點にこそ存分に發揮されておゝり、「一枝の木、一莖の草、一飛鳴一游泳の肖翹、疑似を別たざる靡く、其の歸宿を究」（李化龍序）めたことに盡きるのである。

宋代における雅學の正統はといへば、蓋し邢昺『注疏』、陸佃『新義』や『爾雅鄭注』となるであろう。しかし、「多く鳥獸草木の名を識り、博覽にして惑はざる所以」（『經典釋文』序録）にして、孔子のいわゆる學詩に資するのは、「此の書の成るや、雅の羽翰たらん」と自ら欲した羅願の『爾雅翼』に、まずは指を屈せざるを得ないのではないか。

## 附記

この小論において、『爾雅翼』については「學津討原」本に基づく「叢書集成初編」所收の排印本（商務印書館、一九三五）を用い、適宜、石雲孫

點校『爾雅翼（修訂再版）』（黃山書社、二〇一三）を参照した。『爾雅』については、故宮博物院景印「天祿琳琅叢書」所收の宋監本『爾雅郭注』に校勘を加えた周祖謨『爾雅校箋』（江蘇教育出版社、一九八四、のち雲南人民出版社、二〇〇四）に據り、歷代諸注については、郭璞注と邢昺『爾雅注疏』（十三經注疏整理本、北京大學出版社、二〇〇〇）とを除き、多く朱祖延主編『爾雅詁林』（湖北教育出版社、一九九六）を利用した。解釋においては、郝懿行『爾雅義疏』（十三經清人注疏、中華書局、二〇一七）、邵晉涵『爾雅正義』（同）のほか、近人の徐朝華『爾雅今注』（南開大學出版社、一九八七）、郭鄂『爾雅注證』（商務印書館、二〇一三）等を参照した。また、『爾雅翼』に關わる序跋、識語等については、各別集のほか朱祖延主編『爾雅詁林敘錄』（湖北教育出版社、一九九八）、汪中文編『爾雅著述考』（國立編譯館、二〇〇三）を参照し、羅願に關わる傳記や諸詩文については、程敏政『新安文獻志』（徽學研究資料輯刊、黃山書社、二〇〇四）、蕭建新・楊國宜『新安志整理與研究』（徽學研究資料輯刊、黃山書社、二〇〇八）、洪武二年羅宣明刻本景印『羅鄂州小集』（北京圖書館古籍珍本叢刊、書目文獻出版社、一九九八）、粵雅堂叢書本『鄂州小集・附羅鄂州遺文』（叢書集成初編排印本、商務印書館、一九三五）を用いた。

## 注

① 朱熹が羅願を推重し、その天逝を哀惜したことは、この後、羅願に關する傳記や著作の題跋にしばしば引用されることとなる。例えば、曹涇「鄂州太守存齋羅公傳」（以下、曹涇「羅公傳」）に「淳安縣社壇記、文公自謂不如。謂公文有經緯、又謂公文止此可惜」、方回「爾雅翼跋」に「晦翁謂文有經緯、嘗欲附名集後、又謂羅端良止此可惜」、黃以祚「新安志書後」に「先生生與朱子同時、亟稱其文字縝密有經緯。又謂有西漢人之風」などとある。なお、羅願の詳細な傳記を残した曹涇は、咸淳四年（一二六八）の進士。宋朝滅亡後は徽州紫陽書院山長として講學した人物であり、『文

獻通考』の撰者として知られる馬端臨の師。『爾雅翼』に音釋を施した洪焱祖に「曹主簿涇傳」（『新安文獻志』卷九十五）がある。同じく徽州羅氏が家藏していた稿本『爾雅翼』を見出した方は、歙縣出身で景定三年（一二六二）の進士。『瀛奎律髓』の編者として知られ、やはり洪焱祖による「方總官回傳」（同）がある。

② 曹涇「羅公傳」に「乾淳間、朱文公、周益公、視爲畏友」とある。

③ 羅願の遺稿集『羅鄂州小集』を編纂刊行したのも劉清之であった。『宋史』卷四三七に立傳され、「臨江人。受業於兄靖之、甘貧力學、博極書傳。登紹興二十七年（一一五七）進士第」という。羅願が知州任期中に歿した時、通判州事として同僚であったが、羅願には劉清之の父兄に對する行狀類（『劉豐國行錄』『書劉子和行狀後』）もあり（『羅鄂州小集』卷四）、以前からかなり親密な間柄であったことがうかがわれる。劉清之は朱熹のほか呂祖謙、周必大らとも交流があり、歴史的な對論「鵝湖之會」（一一七五）にも參加している。『宋元學案』卷五十九にその學統が立てられている。

④ 『宋史』卷三八〇「羅汝楫傳」に「願、字端良、博學好古。法秦漢爲詞章、高雅精煉、朱熹特稱重之。有小集七卷、爾雅翼二十卷。知鄂州、有治績、以父故不敢入岳飛廟。一日、自念吾政善、姑往祠之、甫拜、遽卒於像前。人疑飛之憾不釋云」とある。

⑤ 曹涇「羅公傳」に「羅氏之先、在春秋爲小國、隸襄之宜城、徙荆之枝江、因以爲氏。公之先、五季時、自豫章避地來歙、遂爲徽州歙縣人」、洪适「羅尚書墓誌銘」（『盤洲文集』卷七十七）に「公羅氏、諱汝輯字彥濟。其先自豫章辟五季之亂、徙家於歙、遂爲歙人。曾祖諱仁昇、祖諱承吉、考諱舉、以公故累封至右朝請大夫。羅本春秋時小國、在襄之宜城、又徙荆之枝江」とある。なお、宋元代における徽州羅氏については、前村佳幸「宋代士大夫の著作とテキストの流傳」（『統合テキスト科学研究』第二號、二〇〇四）に詳しい。

⑥ 羅汝楫の傳記については、前村佳幸「淳熙『新安志』先達における士大夫像」（『統合テキスト科学研究』第四號、二〇〇六）に「新安志」との關わりで詳述されている。

⑦ 宮崎一定「宋代官制序説―宋史職官志を如何に讀むべきか―」（佐伯富編『宋史職官志索引』所收、東洋史研究會、一九六三、のち『宮崎一定全

集』第十卷所收、岩波書店、一九九二）第三章參照。

⑧ 朱熹に「除秦檜祠移文」（『晦庵先生朱文公文集』卷九十九）がある。

⑨ 『宋史』羅汝楫傳に、「拜監察御史。未逾月、遷殿中侍御史。與中丞何鑄交章論岳飛、罷其樞筦。朱芾、李若虛嘗爲飛議曹、主帥有異意而不能諫。又言、飛獄具、寺官聚斷、咸謂死有餘罪、寺丞何彥猷、李若樸獨喧然以衆議爲非、欲從輕典、皆坐黜。王庶謫道州、郡丞孫行儉以官廢居之、汝楫劾其無忌憚當斥、且令庶徙居。劉子羽知鎮江、上言、和好非久遠計、宜及閒暇爲備。檜怒、風汝楫論罷之」とあり、前掲前村論文（二〇〇六）は、『建炎以來繫年要錄』卷一四一から一四七によって、「（羅汝楫は）殿中侍御史として、御史中丞の何鑄とともに岳飛を彈劾して樞密副使の辭任に追い込み、さらに右諫議大夫として、岳飛の屬僚であった朱芾と李若虛、岳飛の處罰を輕減しようとした大理寺丞の何彥猷と李若樸を彈劾するとともに、四川の道州に配流され當地で歿することになる王庶に官舎を提供していた通判や鎮江府の知事劉子羽を彈劾した」とまとめる。

⑩ 恩蔭制度と鎖廳試については、荒木敏一『宋代科舉制度研究』（東洋史研究會、一九六九）、及び梅原郁『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五）、また、同「宋代の恩蔭制度」（『東方學報』第五十二冊、一九八〇）を參照。

⑪ 范成大『吳船錄』卷下に、「晨出大江、午至鄂渚。泊鸚鵡洲前南市堤下。南市在城外、沿江數萬家、塵閭甚盛、列肆如櫛。酒墟樓欄尤壯麗、外郡未見其比。蓋川廣荆襄淮浙貿遷之會、貨物之至者無不售、且不問多少、一日可盡、其盛壯如此」とある。

⑫ 汪舜民『徽州府志』羅願傳にも（『淳熙』十一年甲辰七月、值旱立日中、精禱致疾。及祠岳飛廟遽卒、年四十九。鄂人繪像于靈竹寺孟宗泣竹處」とある。なお、『四庫全書總目提要』鄂州小集は、「淳熙甲辰、願由知南劍州改鄂州、乙巳卒於官」といい、その死を「乙巳」すなわち淳熙十二年（一一八五）とする。

⑬ 汪士禎『池北偶談』卷七「趙忠毅公擇言」には、「宋鄂州知州羅願、以父汝楫爲御史時、常附檮論岳武穆、不敢入武穆廟。一日自念吾政善、姑往祀之、再拜遂卒。鄂州廩廩、爲乾道淳熙間名臣、其卒、朱子尤痛惜之、恨未見其止。鄂人感其德、爲之圖像以祀。歐陽宜諸曰、願素行無愧於侯、

其卒也、未必侯所爲意者。善惡之報、不於其身、則於其子孫。樂盈非爲、汰而受變、惡以殺其身、亦理之或然者。予謂羅公賢者、以其父之構陷武穆、而又近於其廟、愧恨不敢入、五内切剝久矣。一旦瞻其遺像、大命遂傾、惜哉。小人之子孫、惟宜愚不肖耳。稍賢智則其苦皆若鄂州、求死不得也」とある。

⑭ 前掲前村論文(二〇〇四)は、「羅願の生涯は自ら望んで地方官と祠官ばかりに就いて出世よりも讀書と學究を優先させ、『新安志』など地元に着した内容のテクストも執筆するといった穩やかなものである。科擧に合格しながら、中央官界での榮達よりは地域社會に深く關與することを志向する姿勢が南宋時期の士大夫層において顯著となることはつとに知られている」と述べ、また「南宋から元代そして民初にかけて、官僚としては榮達したものの著作の傳わっていない汝楫よりは、書物のかたちをもつて存在している『新安志』『爾雅翼』及び『羅鄂州小集』の作者である羅願が徽州羅氏の最も代表的人物となり、その家系のルーツとなるべき存在として後代の羅氏に強く意識されるようになったことを指摘できるだろう」とも述べる。

⑮ 郭璞『爾雅注』序には、「夫爾雅者、所以通話訓之指歸、敘詩人之興詠、摠絕代之離詞、辯同實而殊號者也。誠九流之津涉、六藝之鈐鍵、學覽者之潭奥、擣翰者之華苑也。若乃可以博物不惑、多識於鳥獸草木之名者、莫近於爾雅」とある。

⑯ 例えば、『爾雅』釋詁「粵、于、爰、日也」の郭注は「書曰、土爰稼穡。詩曰、對越在天、王于出征」であるが、邢疏は「云書曰土爰稼穡者、周書洪範文。云詩曰對越在天者、周頌清廟文。云王于出征者、小雅六月文」と出典の説明に終始しており、釋草「孟、狼尾」の郭注は「似茅、今人亦以覆屋」であるが、邢疏は「草似茅者、一名孟、一名狼尾。今人亦以覆屋」と何らの知見も加味しない。また、小林清市「清朝考證學派の博物學」(山田慶兒編『東アジアの本草と博物學の世界』所收 思文閣出版、一九九五)は、「『もの』の特定をめざしながら、ときには『未詳』『未聞』と記さざるを得なかった郭璞の思ひは、邢昺によってみごとに黙殺されている。すくなくとも郭璞にとっては現實の『もの』は文献資料や圖と比肩しうる比重を備えていた。郭注をすぐれた植物誌と呼ぶ所以である。しかし、邢昺

にとつては『もの』など意識外の代物である」と述べる。

⑰ 錢大昕「爾雅釋文補序」に「北宋邢叔明專疏郭景純注、墨守東晉一家之言、識已拘而鮮通、其爲書他、又不過鈔撮孔氏經疏、陸氏釋文、是學亦未能過人矣」、邵晉涵『爾雅正義』序に「邢氏疏成於宋初、多掇拾毛詩正義、掩爲己說。開采尙書、禮記正義、復多闕略。南宋人已不滿其書、後取列諸經之疏、聊取備數而已」とある。

⑱ 家學として本草や醫藥に通ずる陸游と祖父陸佃との關係については、拙論「陸游と孤—放翁詩作をめぐる本草學的考察—」(『學林』第四十六號、二〇〇八)、及び拙論「『孤』の本草學—陸游詩所詠孤草考序說—」(『福島大學研究年報』第一號、二〇〇五)を参照。

⑲ 羅桂環・汪子春主編『中國科學技術史・生物學卷』(科學出版社、二〇〇五)第四章に、「陸佃の書中對於動植物的形態、分類、生境、用途乃至歷史記載等方面、都有較詳盡的考釋、向來爲後人重視、可以說埤雅是北宋時期生物學的重要著作之一」とある。

⑳ 『四庫提要』に、「其學問淵源、則實出安石。晁公武讀書志、謂其說不專主王氏、亦似特立。殆未詳檢是編、誤以論其人者論其書歟。觀其開卷說龍一條、至於謂曾公亮得龍之脊、王安石得龍之睛。是豈不尊安石者耶。然其詮釋諸經、頗據古義。其所援引、多今所未見之書。其推闡名理、亦往往精鑿。謂之駁雜則可、要不能不謂之博奧也」とある。

㉑ 汪子春・羅桂環・程寶綽『中國古代生物學史略』(河北科學技術出版社、一九九二)第四章に、「爾雅翼、是繼埤雅之後、對動植物研究更爲深入的重要專著。：接近爾雅名數、比埤雅多出很。在考證上更加精細、引據精確、持論謹嚴、把當時知識與親自經歷和民間資料結合起來、把進行動植物名實考證、較前人有較大發展。(『釋魚』『釋木』の生態描寫例中略)剖析清楚、歷歷如繪」とある。

㉒ 胡樸安『中國訓詁學史』(商務印書館、一九三九)第一章に、「羅氏此書、專爲名物之辨。：雖未必皆確鑿不移而極可爲名物研究之助。：惟自宋以來諸儒、詳于性理之談、略于名物之辨。鄭樵之昆蟲草木略、陸佃之埤雅、羅願之爾雅翼、皆是有宋一代、名物學之著作。鄭非專書、如以蘭蕙爲一物、疎漏時有。陸多比附王安石字說。而羅書爲善。：要之羅氏之書、在名物學上自有相當之價值。洵可爲爾雅之翼也」とある。

- ⑲ 『楚辭』の「離騷」に多くの草木が詠みこまれることの重要性については、拙論「離騷」に詠まれる芳草香木の本草學的考察―巫醫作離騷考序説―（『立命館文學』第五六三號、二〇〇〇）、及び拙論「離騷」蘭芷佩服考―巫祝と香草―（大野圭介編『楚辭と楚文化の総合的研究』所收、汲古書院、二〇一四）を参照。
- ⑳ 羅桂環「宋代的鳥獸草木之學」（『自然科學史研究』第二十卷第二期、二〇〇一）は、「最早提出這一問題、明確強調鳥獸草木之學非常重要、并且致力使之發展的學者著名史學鄭樵。鄭樵是南宋初期一位知識非常淵博的學者。受當時學術風氣的影響、他非常重視生物學知識的獲得和傳播」と述べる。
- ㉑ 陸璣『詩疏』の書誌については、矢島明希子「陸氏毛詩草木鳥獸蟲魚疏の基礎的研究―篇目から見る各本の相違―」（『斯道文庫論集』第五十輯、二〇一五）、及び同「日本における『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の出版―和刻本と圖解本―」（『斯道文庫論集』第五十二輯、二〇一七）、また、重野宏市「『四庫全書總目提要』『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』譯注」（『筑波中國文化論集』第三十五號、二〇一六）等を参照。
- ㉒ 揚雄『方言』卷十一には、「蟬、楚謂之蜩、宋衛之間謂之蟪蛄、陳鄭之間謂之蜩蝻、秦晉之間謂之蟬、海岱之間謂之蟬。其大者謂之蜩、或謂之蝻。其小者謂之蜩蝻、有文者謂之蟪蛄、其無文者謂之蝻、大者謂之蝻、黑而赤者謂之蝻。蝻謂之蝻。蝻謂之寒蝻、寒蝻、瘖蝻也」とある。
- ㉓ 陸璣『詩疏』の特徴については、小林清市「陸疏の素描」（『中國思想史研究』第九號、一九八七、のち『中國博物學の世界』所收、農山漁村文化協會、二〇〇三）に詳しい。
- ㉔ 渡邊幸三「陶弘景の本草に對する文獻學的考察」（『東方學報』第二十二冊、一九五一、のち『本草書の研究』所收、杏雨書屋、一九八七）第三章「敦煌本本草集注序録について」を参照。
- ㉕ この本草書重層化の歴史を打破し、まったく独自の見解に基づいて編纂されたのが李自珍『本草綱目』である。孫星衍が「校定神農本草經序」（『問字堂集』卷三）において、「見明李時珍作本草綱目、其名已愚、僅取大觀本割裂舊文、妄加增駁、迷誤後學」と痛烈に批判したのもゆえなしとしない。
- ⑳ 紹興二十九年（一一五九）、王繼先らが高宗の奉敕により『大觀本草』を校定して『紹興校定經史證類備急本草』を撰したようであるが、その刊行は節略本のみであつたらしい。岡西爲人『本草概説』（創元社、一九七七）第五章「宋代の本草」を参照。
- ㉑ 汪藻『靖康要錄』卷十一に、「（靖康二年二月）二日、壞司天臺渾儀、輪軍前。虜圖明堂九鼎、觀之不取。止索三館文籍圖書國子監書板」とある。錢大昕「證類本草」（『十駕齋養新錄』卷十四）には、「是書初版于杭州漕司。艾晟序謂慎微不知何許人、其云大觀本草者、因校刊之年題之也。其後曹孝忠被旨校刊、乃系以政和之名。若慎微著書、實在元祐之世、不特非政和、亦非大觀也。其書本名經史證類備急本草、大觀政和皆後來所題。而政和之名出于朝旨、則當以政和爲正。然南宋人多稱大觀本草者、政和新修之本經汴京淪喪、不及流播東南。陳直齋所收、亦祇浙漕司本、未暇訂正耳」とあり、『四庫提要』聖濟總錄纂要には、「考晁陳二氏書目、但有徽宗聖濟經、不載是書。觀焦惠序、稱始成於政和、重刊於大定。殆汴京破後、隨內府圖籍北行、南渡諸人、未睹其本歟。今未見其原書」とある。渡邊幸三「唐慎微の經史證類備急本草の系統とその版本」（『東方學報』第二十一冊、一九五三、のち『本草書の研究』所收、杏雨書屋、一九八七）を参照。
- ㉒ 羅願『新安志』先達には、朱熹の父で徽州本貫の朱松も「朱吏部」として立傳されているが、實はその大半は朱熹の傳なのである。錢大昕「跋新安志」（『潛研堂文集』卷二十九）は、「志成於淳熙二年。朱晦翁（朱熹）名位未顯、且見存、不在立傳之例。而於韋齋（朱松）傳末稱其讀書求志、有四方學者推尊之語、亦見其傾倒於朱（熹）也」と述べ、當時存命かついまだ無名であつた朱熹への紙幅を割いた言及は立傳の例にあらざるも、羅願の朱熹への傾倒がよく現れているとみなす。
- ㉓ 朱熹に師從した復齋先生こと陳宓の「朱文公祠堂記」によると、朱熹が莆田を數度にわたり訪れていたのは事實らしい。楊國楨『海濤集』（海洋出版社、二〇一五）「鄭樵傳説調査」を参照。
- ㉔ 蔣維鈞・陳長城「鄭樵事迹四考」（『福建論壇』一九九八年第四期）を参照。
- ㉕ 夏廣興「羅願和他的爾雅翼」（『辭書研究』一九九七年第五期）は、「羅願有感于當時人們對名物詞語知識的歉缺和無知、于是萌發創作此書的動

機、并願千世之下、與雅并行。這一良好的願望和強烈的責任感、鑄成了這一洋洋萬言的著作」(李軍「基于漢語訓詁學的動植物名詞專著爾雅翼編纂特色研究」、『農業考古』二〇一一年第四期に出處を示さずそのまま引用)と述べ、莊雅州「羅願及其爾雅翼」(『陳新雄教授八秩誕辰紀念論文集』所收、萬卷樓圖書股份有限公司、二〇一五年)は、「在舉世崇尚心性之談、略於名物之辨的宋代、羅願所以發憤著述爾雅翼。(自序の引用部分中略)這是相當符合科學實證精神與古來名物學研究傳統的」と述べる。

③⑥ 羅願と趙不悔の原序には「淳熙二年三月癸未」とあり、間もなく刊行されたらしいが、この宋本は現存しない。『新安志』については前掲書『新安志整理與研究』に詳考されており、羅願に關する史料も廣汎に蒐集されている。

③⑦ 王應麟「爾雅翼識語」に、「小集僅傳、知此(爾雅翼)者希。歲甲午(一一七四)書成、迨庚午(一二七〇)九十七載、出若有期。自今顯行、式永厥垂。繇是進大學之道、學者葆之。先是公之從曾孫裳、錄藏家楹。訪求得其書、則前大學博士方君回也。識卷後而刊於郡者、浚儀王應麟也」とある。

③⑧ 洪焱祖「爾雅翼跋」に、「咸淳庚午、郡守厚齋先生浚儀王公應麟始刊布之、今五十年矣。板逸不存、郡守自齋先生北誦朱公霽屬學官訪求墨本、節費重刊、且以難字頗多、初學未能遽曉、俾焱祖詳加音釋、附於各卷之末。又舊本出於筆吏之手、頗有訛舛、謹爲正之、所不知者闕」とある。

③⑨ 「靜嘉堂文庫漢籍分類目錄」(靜嘉堂文庫、一九三〇)参照。なお、程光裕「羅願著述考」(『華岡文科學報』第十二期、一九八〇、『宋史研究集』第十三集、一九八一)のち「常溪集」所收、中國文化大學出版部、一九九六)は、『羅鄂州小集』の靜嘉堂文庫藏明刊本を記載するものの、『爾雅翼』の元刊本現存については觸れていない。

④⑩ 羅願の淳熙『新安志』に續き、『新安續志』(一一三三五)と『新安後續志』(一一三一九)が、明代には『重編新安志』(一一三七七)が前志らを包含するかたちで編纂されている。

④⑪ 張國淦『中國古方志考』(中華書局、一九六二)、顔宏義『宋朝方志考』(上海古籍出版社、二〇一〇)、劉緯毅『宋遼金元方志輯佚』(上海古籍出版社、二〇一〇)、『永樂大典方志輯佚』(中華書局、二〇〇四)等参照。

④⑫ 『新安志』の版本は、吳瞻泰と黃以祚の書後を附す康熙四十六年(二七〇七)刊本までしかさかのほれず、これが現存最古となる。

④⑬ その後の『爾雅翼』刊行の経緯については、前掲前村論文(二〇〇四)にまとめられており、「明清時代において『羅鄂州小集』と『爾雅翼』は、主として羅願の後裔と稱する同姓の者と徽州出身の人物により刊行され流布していたことが指摘される」と述べる。趙華富『徽州宗族研究』(安徽大學出版社、二〇〇四)参照。

④⑭ 前掲拙論「孤」の本草學—陸游詩所詠孤草考序説—参照。孤實が穀物の一種とみなされていたことは、禮書や漢儒の諸注からもうかがわれる。例えば、『周禮』食醫に「凡會膳食之宜、牛宜稌、羊宜黍、豕宜稷、犬宜粱、雁宜麥、魚宜菰。凡君子之食、恆放焉。(鄭衆注)菰、彫胡也、麥、而有粱菰、周禮膳夫に「凡王之饋、食用六穀、膳用六牲、飲用六清。(鄭衆注)六穀、稌黍稷粱麥菰。菰、彫胡也、禮記内則に「食、蝸醢而菰食雉羹。(鄭玄注)菰、彫胡也」などとある。

④⑮ 「蓬蔬」の語源が、「詩經」邶風「新臺」にみえる「蓬條」に同じく魚部疊韻の聯縣語であることについては、拙論「爾雅釋草蓬蔬考」(『學林』第二十七號、一九九七)を参照。また、「菰米」「菰菜」の詳細や羅願の考證にも一部謬見があることについては、前掲拙論「孤」の本草學—陸游詩所詠菰草考序説—を参照。

④⑯ 『新安志』の「物産」については、『四庫提要』に「其物産一門、乃願專門之學、徵引尤爲該備」とある。

④⑰ 陸游の詠菰詩と類繁なる菰食とについては、前掲拙論「陸游と菰—放翁詩作をめぐる本草學的考察—」を参照。

④⑱ 「蝾蠃」と「螟蛉」の關係については、加納喜光「草木蟲魚のシンボリズム—詩經の博物誌から—」(『漢文教室』一四七號、一九八三)のち「漢字の博物誌」所收、大修館書店、一九九二)、及び小林清市「經學者の昆蟲觀—蝾蠃の生態を手掛かりにして—」(『山口大學教育學部研究論叢』第四十四卷第一部、一九九四)のち『中國博物學の世界』所收、農山漁村文化協會、二〇〇三)に詳しい。

④⑲ 張華『博物志』卷四にも、「大腰無雄、龜鼈類也。無雄、與蛇通氣則孕。

細腰無雌、蜂類也。取桑蠶則阜螽子呪而成子、詩云螟蛉之子、蜾蠃負之、是也」とある。

⑤0 『蘇頌『本草圖經』』 蠨螋に、「數說不同。人或疑之。然物類變化、固不可度。蚱蟬生於轉丸、衣魚生於瓜子、龜生於蛇、蛤生於雀、白駝之相視、負螽之相應、其類非一。若桑蟲蜘蛛之變爲蜂、不爲異矣。如陶所說卵如粟者、未必非祝蟲而成之也」とあり、呪文化生の古説を全面的に支持して陶弘景にも反駁している。

⑤1 『埤雅』卷十一「果蠃」には古説を支持して、「即今細腰土蠶、好禁蜘蛛。説文云、天地之性、細腰純雄、無子。列子曰、純雄、其名釋蜂。蓋其類也。漣泥作房、如併竹管、取桑蟲負之、七日而化爲子、其祝聲可聽。法言曰、祝之曰、類我。蓋其音云也。莊子曰、細腰者化。今呼大蠶、啖子、地中作房者、亦曰土蠶、非此細腰土蠶也。果蠃、一名蠨螋、一名蒲盧。中庸曰、政也者、蒲盧也。化書曰、嬰兒似乳母、斯不遠矣」とある。朱熹『詩集傳』は小序を否定し「此大夫遭時之亂、而兄弟相戒以免禍之詩」としつつも、「螟蛉有子、則蜾蠃負之、以興不似者可教而似也。教誨爾于、則用善而似之可也」と、やはり古來の化生説を支持している。

⑤2 程大昌『演繁露』卷十五に、「蒲盧直是蒲與蘆耳。今人釋中庸以蒲盧爲螟蛉。其誤當始説文」とある。

⑤3 朱熹『中庸章句』に、「以人立政、猶以地種樹、其成速矣、而蒲葦又易生之物、其成尤速也。言人存政舉、其易如此」とある。

⑤4 聯縣の擬態語による異類同名現象については、拙論「列子華胥考—古漢語における異類同名について—」（『學林』第四十一號、二〇〇五）、及び

拙論「古音魚部疊韻考—古漢語における圓球・屈短の聯縣語について—」（『學林』第五十三號、二〇一一）、また、王國維「爾雅草木蟲魚鳥獸名釋例」（『觀堂集林』卷五）を参照。

⑤5 黃侃「爾雅略説」（『黃侃論學雜著』所收、中華書局、一九六四）に、「今案鄂州是書、引證誠爲浩博。…雖援據載籍極多、治爾雅者、亦祇能等之於埤雅之流、以視陸璣毛詩義疏、陶弘景本草注、固不逮遠甚矣」とあり、駱鴻凱「爾雅論略」（嶽麓書社、一九八五）も出處を示さず黃説を引用している。

⑤6 前掲書『中國科學技術史・生物學卷』は、「從羅願描述某一種動植物的敘述順序上、還可以看出、他具有較多的動植物分類知識、這方面也是高于埤雅作者的」と述べ、「爾雅翼」には既に生物學における「科屬的概念」が反映されているとして具體例を挙げている。

⑤7 『晦庵先生朱文公文集』卷四十四「答江德功」に、「格物之説、程子論之詳矣。而其所謂、格至也。格物而至於物、則物理盡者、意句俱到、不可移易。熹之謬説實本其意」とあり、『朱子語類』卷六十二には「天地中間、上是天、下是地、中間有許多日月星辰山川草木人物禽獸、此皆形而下之器也。然這形而下之器之中、便各自有箇道理、此便是形而上之道。所謂格物、便是要就這形而下之器、窮得那形而上之道理而已」とある。

⑤8 顧璘「爾雅翼書後」には、「是書之於格物詳矣、學者能復熟研究、由是而進、大學之道、蓋無難者」とある。

（福島大學人間發達文化學類教授）